

上峰町文化財調査報告書第13集

八 藤 遺 跡 I

平成元年度佐賀県営農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997年3月

上峰町教育委員会





上峰町文化財調査報告書第13集

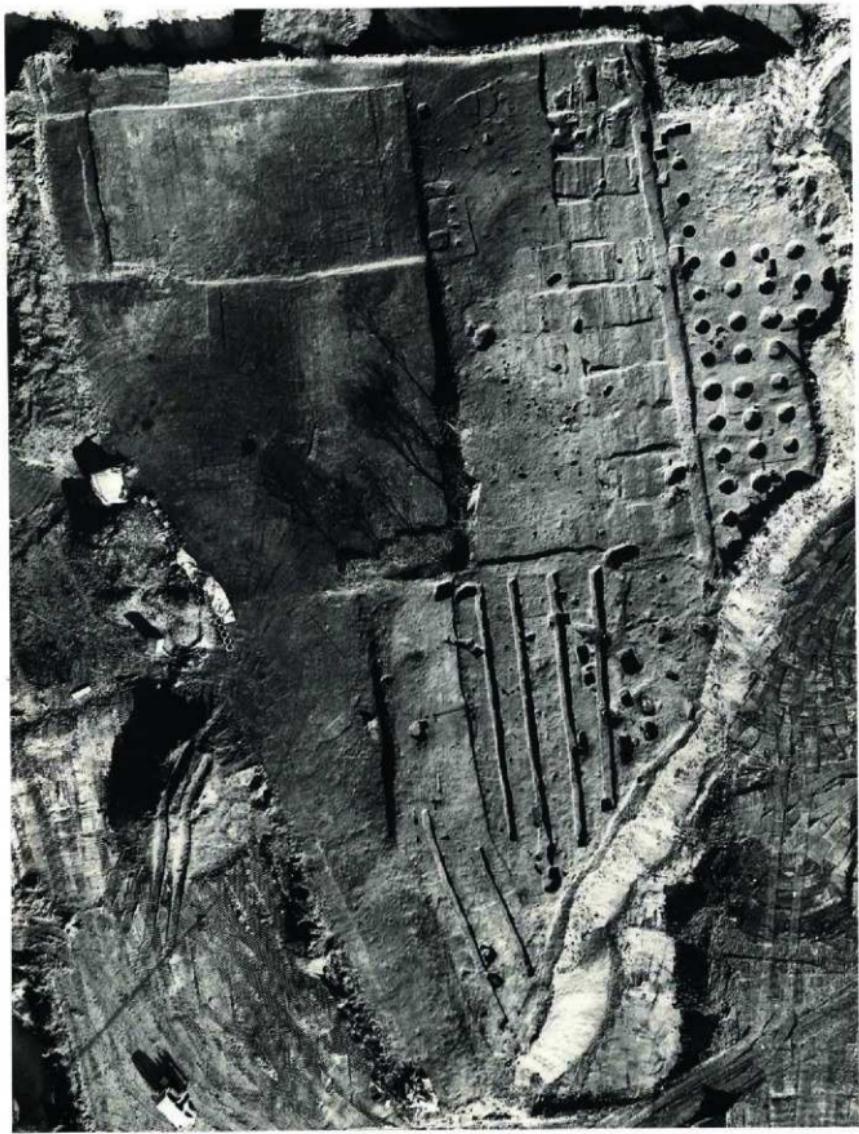
やとう
八 藤 遺 跡 I

平成元年度佐賀県営農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

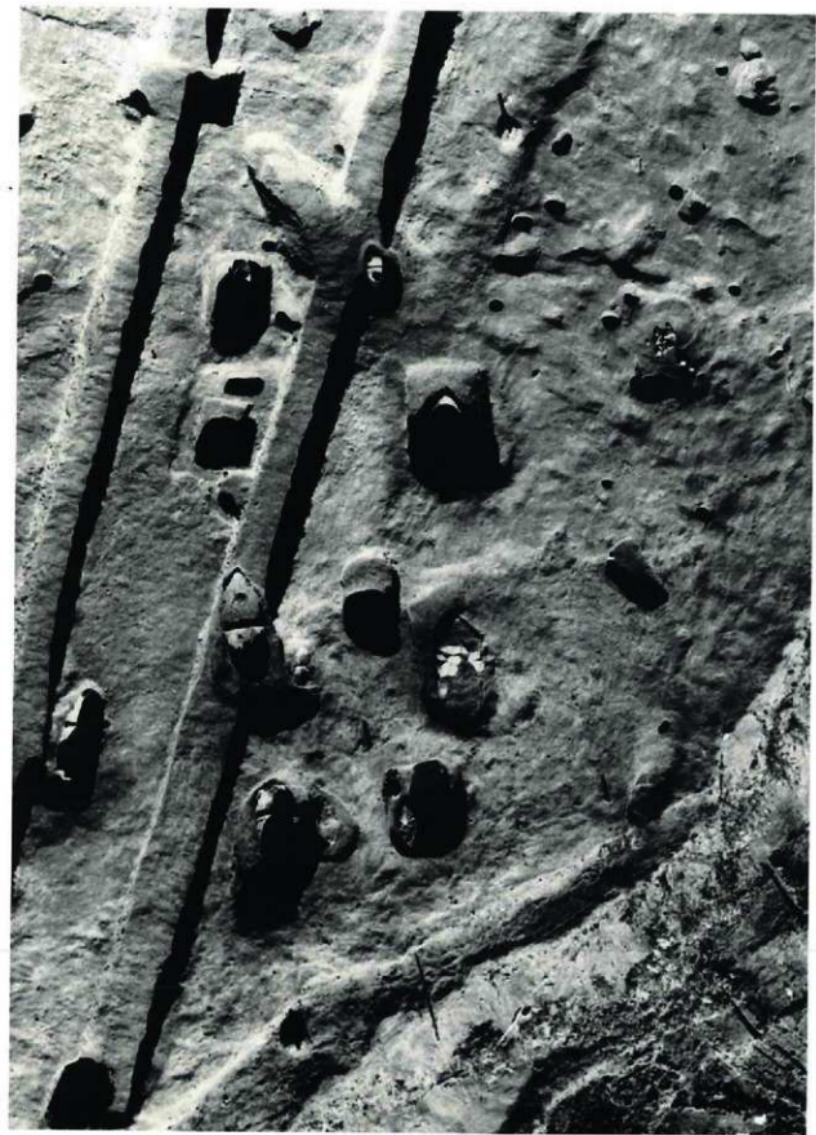


1997年3月

上峰町教育委員会



調査区域全景 一写真上方が北一



墳棺墓集中部分（B群2区）—写真上方が北—

序

従来より、上峰町は遺跡の宝庫と言われてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生する南北に延びる洪積世丘陵と開析谷、さらに有明海へと続く沖積平野と変化にとんだ地形を含む町域には、いたるところに先人たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。

教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存・活用し、将来へ繼承していくために、開発と文化財の保護との調整を図ってまいりました。

上峰町では町北部の大字堤地区を対象とした県営農業基盤整備事業が昭和60年度より開始され、これに伴う埋蔵文化財発掘調査を進めております。

この報告書は、平成元年度に実施した八藤遺跡の埋蔵文化財発掘調査事業の報告書であります。今回の発掘調査では時期を同じくする30基ほどの甕棺墓が検出され、ある一時期の弥生の「ムラ」の集団構成を伺い知るうえで、数百基の甕棺墓をはじめとし土壙墓、石棺墓などが多数検出された二塚山遺跡群や船石南遺跡とはまた別の意味での貴重な資料を得ることができました。

この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力いただいた文化庁、佐賀県教育委員会文化財課、佐賀県農林部をはじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成9年3月

上峰町教育委員会

教育長 古賀一守

例　　言

1. 本書は、平成元年度佐賀県上峰北部農業基盤整備事業に伴い、上峰町教育委員会が発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字八藤に所在する八藤遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、農業基盤整備事業の施工により削平を受ける部分3,800m²について調査区域を便宜的に1～3の3区に分割し、1区(1,300m²)の調査を国庫補助事業とし、2区(2,360m²)及び3区(140m²)を佐賀県農林部の委託事業として、上峰町教育委員会が主体となり実施したものである。
3. 現地での発掘調査は平成元年9月25日から平成2年1月26日まで行った。
4. 現場での遺構実測作業は、調査員の指示により実測作業員があつた。また、甕棺墓等一部の実測作業を新九州測量設計株式会社に委託した。
5. 遺構及び出土遺物の写真撮影は原田大介が行った。また、空中写真撮影を有限会社空中写真企画に委託した。
6. 一部甕棺墓より検出された埋葬人骨の調査、取り上げ、分析を、長崎大学医学部解剖学第二教室 松下孝幸 助教授(調査時)に依頼した。本書の刊行にあたって、諸般の事情により埋葬人骨についての報告を収録することができなかつた。これは編者の責によるもので、関係各位にお詫びするとともに、早急に補遺したい。
7. 調査後の出土遺物、記録類の整理作業は上峰町船石文化財整理事務所にて実施した。
8. 本文中の挿図の実測図作成、トレース作業等は調査員の指導で製図作業員があつた。
9. 本書の執筆、編集は原田が行った。
10. 今回の調査の出土した甕棺墓出土埋葬人骨を除く、全ての遺物、図面・写真・記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　　例

1. 八藤遺跡の略号は「YTO」であり、今回の調査区略号は「YTO-1～3」とした。
2. 遺構番号は発掘調査当時のままとした。また、遺構番号に冠した2文字のアルファベットは、遺構の種別を表す。
S H……堅穴式住居址 S K……土壤・貯蔵穴 S J……甕棺墓 S B……掘建柱建物址
S D……溝跡・溝状遺構 S X……性格不明・その他
3. 挿図中の方位は、既成の地形図を用いたものは特記のないかぎり図上方が座標北、現場で作成した遺構図等は図中方位が磁北を表している。
4. 表中の数値に付した記号で、()は推定値を、※は部分値をそれぞれ表す。
5. 遺構実測図中の点線は推定線を一点鎖線は調査区境界をそれぞれ表す。
6. 上峰村は、本調査中、平成元年11月1日町制を施行した。村・町の表記における煩雑さを考慮し、本書では「上峰町」に統一する。

調査組織（発掘調査当時）

調査事務局	総括	松田末治	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	浜田小夜子	/	教育課長（～平成2年1月14日）
	/	馬場英孝	/	教育課長（平成2年1月15日～）
	経費執行	吉田忠	/	社会教育係長
	/	鶴田浩二	/	社会教育係
	/	原田大介	/	/
調査組織	調査員	鶴田浩二	上峰町教育委員会	社会教育係
	/	原田大介	/	/
調査指導		佐賀県教育委員会文化課		

発掘作業参加者

秋山 嶽、秋山エキエ、石橋テル、石丸ミチエ、大坪光代、川原 等、川原ミヨ、川原ヨシエ、北島八重子、黒石光利、高島 畏、高島英子、田中 巧、田中ミスエ、堤 イシ、堤 一、鶴田サヨ子、鶴田久子、鶴田八重子、中村初一、納富ヌイ子、福島一雄、矢動丸ミツエ、山口ミヨ子、和佐治夫

荒木和代、島美保子、深町佐千子、益田敦子、馬原喜美子（以上、実測作業員）

整理作業参加者

大隈弓子、島美保子、田尻裕子、中尾美千恵、馬原喜美子、矢動丸洋子（以上、製図作業員）

目 次

序

例言・凡例

調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

I.	遺跡の位置と環境	1
1.	遺跡の位置.....	1
2.	歴史的環境.....	1
II.	調査の経過	7
1.	調査に至る経緯.....	7
2.	調査の経過.....	8
III.	遺跡の概要	9
1.	遺跡の概要.....	9
2.	調査区の概要.....	9
IV.	遺構	14
1.	竪穴式住居址.....	14
2.	掘立柱建物址.....	14
3.	土壙・貯蔵穴.....	16
4.	溝跡.....	23
5.	甕棺墓.....	23
V.	遺物	47
1.	甕棺.....	47
2.	その他の土器・石器.....	53
VI.	まとめ	54

挿図目次

Fig. 1 上峰町北部地形概略図 (1/10,000)	2
2 八藤遺跡の位置および周辺遺跡 (1/50,000)	4
3 八藤遺跡周辺地形図および調査区位置図 (1/5,000)	10
4 八藤遺跡1～3区遺構配置図 (1/500)	11
5 積穴式住居址・掘立柱建物址実測図 SH-241・SH-242・SB-120 (1/80)	15
6 土壌実測図1 SX-101～SK-117 (1/60)	19
7 土壌実測図2 SK-201～SK-245 (1/60)	20
8 土壌実測図3 SK-246～SK-262 (1/60)	21
9 土壌実測図4 SK-263～SK-302 (1/60)	22
10 溝跡実測図 SD-118・SD-119 (1/200)	23
11 豊棺墓実測図1 SJ-207・SJ-208・SJ-209 (1/20)	25
12 豊棺墓実測図2 SJ-210 (1/20)	26
13 豊棺墓実測図3 SJ-211 (1/20)	27
14 豊棺墓実測図4 SJ-212 (1/20)	28
15 豊棺墓実測図5 SJ-213 (1/20)	29
16 豊棺墓実測図6 SJ-214 (1/20)	30
17 豊棺墓実測図7 SJ-215・SJ-220 (1/20)	31
18 豊棺墓実測図8 SJ-216 (1/20)	32
19 豊棺墓実測図9 SJ-217・SJ-218・SJ-219 (1/20)	34
20 豊棺墓実測図10 SJ-221 (1/20)	35
21 豊棺墓実測図11 SJ-222 (1/20)	36
22 豊棺墓実測図12 SJ-223 (1/20)	37
23 豊棺墓実測図13 SJ-224 (1/20)	38
24 豊棺墓実測図14 SJ-225 (1/20)	39
25 豊棺墓実測図15 SJ-226 (1/20)	40
26 豊棺墓実測図16 SJ-227 (1/20)	41
27 豊棺墓実測図17 SJ-228 (1/20)	42
28 豊棺墓実測図18 SJ-229・SJ-231・SJ-234 (1/20)	43
29 豊棺墓実測図19 SJ-235 (1/20)	44
30 豊棺墓実測図20 SJ-255 (1/20)	45
31 豊棺墓実測図21 SJ-256 (1/20)	46
32 豊棺実測図 SJ-225 (1/8)	50
33 豊棺口縁実測図1 SJ-209～SJ-219 (1/4)	51
34 豊棺口縁実測図2 SJ-220～SJ-255 (1/4)	52
35 出土土器実測図 (1/4)	53

表 目 次

Tab. 1 出土土壤一覧表.....	16
2 出土甕棺墓一覧表.....	24
3 出土甕棺一覧表.....	48
報告書抄録.....	卷末

図 版 目 次

巻頭図版

- P L. 1 調査区域全景
- 2 甕棺墓集中部分（2区）

巻末図版

- 3 1区全景・2区南部（甕棺墓集中部分）・SH-241
- 4 SH-241・SH-242・2区北東部・3区全景
- 5 土壇1 SK-103～SK-111・SX-114
- 6 土壇2 SK-115・SK-117・SK-205・SK-237・SK-238・SK-240・SK-243
- 7 土壇3 SK-244～SK-251・SK-253
- 8 土壇4 SK-260～SK-263・SK-265～SK-267・SK-270
- 9 土壇5・甕棺墓1 SK-301・SK-302・SJ-207～SJ-211
- 10 甕棺墓2 SJ-212～SJ-219
- 11 甕棺墓3 SJ-213・SJ-217～SJ-219・SJ-222～SJ-224
- 12 甕棺墓4 SJ-225～SJ-227・SJ-234・SJ-235・SJ-255
- 13 遺物 SJ-225甕棺・土器・石器

I. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 (Fig. 1)

八藤遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字八藤、迎原の洪積世段丘上（標高20m～35m）に位置している。

八藤遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町・北茂安町、南部は三根町、西部は神埼郡東脊振村・三田川町と境を接している。

鳥栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部の脊振山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部の有明海へと続く沖積平野が展開し変化にとんだ地形が発達している。なかでも山麓から沖積平野へと移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって開析され数多くの南北に延びる舌状を呈した段丘となっている。

八藤遺跡は、町北部の大字堤地区のほぼ中央に所在している。大字堤地区には、中央を南流する切通川の本支流の開析作用で形成された谷底平野を境界として大小の南北に延びる舌状丘陵が発達している。八藤遺跡が立地する八藤丘陵もそのひとつで、堤地区北部の山麓から派生する丘陵であり、東方の船石丘陵、西方の二塚山丘陵とはそれぞれ切通川の支流である大谷川、切通川本流の開析谷によってそれぞれ分かたれている。

2. 歴史的環境 (Fig. 2)

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述の洪積世段丘が古くから人々の生活の舞台となっており、各段丘上には遺跡の分布が知られ、県内でもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵のほとんどが集落あるいは墓域として占有され、縄文時代遺跡と比較すると、量的にも質的にも爆発的に増加、充実する。銅鐸の鉢型を出土した鳥栖市安永田遺跡²、約400基の甕棺墓が検出された中原町姫方遺跡³、12本の銅矛を埋納した北茂安町検見谷遺跡⁴、甕棺墓から軸載鏡を出土した東脊振村三津永田遺跡⁵、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構・遺物が検出された三田川・神埼・東脊振の2町1村にまたがる吉野里遺跡⁶など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ、弥生の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。南北約12km、東西約3kmと南北に細長い町域をもつ本町においても同様で、町の北部から中央部を占める洪積世段丘を中心に弥生時代の遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡は、各段丘ごとに層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の出土にとどまっている。町内では、平成4年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の調査において細石刃1点が発掘調査において検出されているのみ⁷、三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器が採取されている⁸。平成5年度の八藤遺跡下層における阿蘇4火碎流と埋没林に係る調査では、先土器時代の年代示標となっている始良一Tn火山灰(AT)の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査で遺構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風化土層の最上部で検出されている⁹。

縄文時代になると中原町香田遺跡¹⁰や東脊振村戦場ヶ谷遺跡¹¹などが出現する。町内においてもこれまで町北部の丘陵部から土器や石器が採取されていたが、農業基盤整備事業に伴う調査の結果、平成元年度の船石遺跡11区¹²はじめ八藤遺跡¹³などで遺物・遺構がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数、規模、内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから魏志倭人伝の「弥奴國」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは

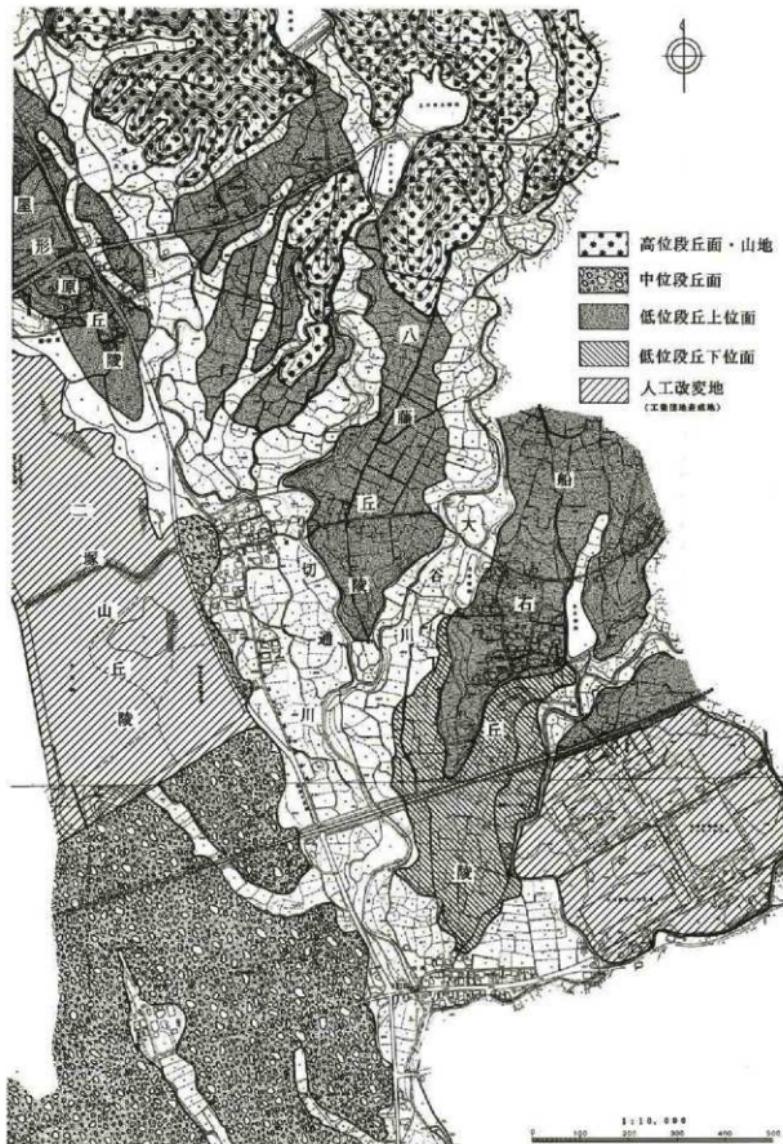


Fig. 1 上峰町北部地形概略図 (1/10,000)

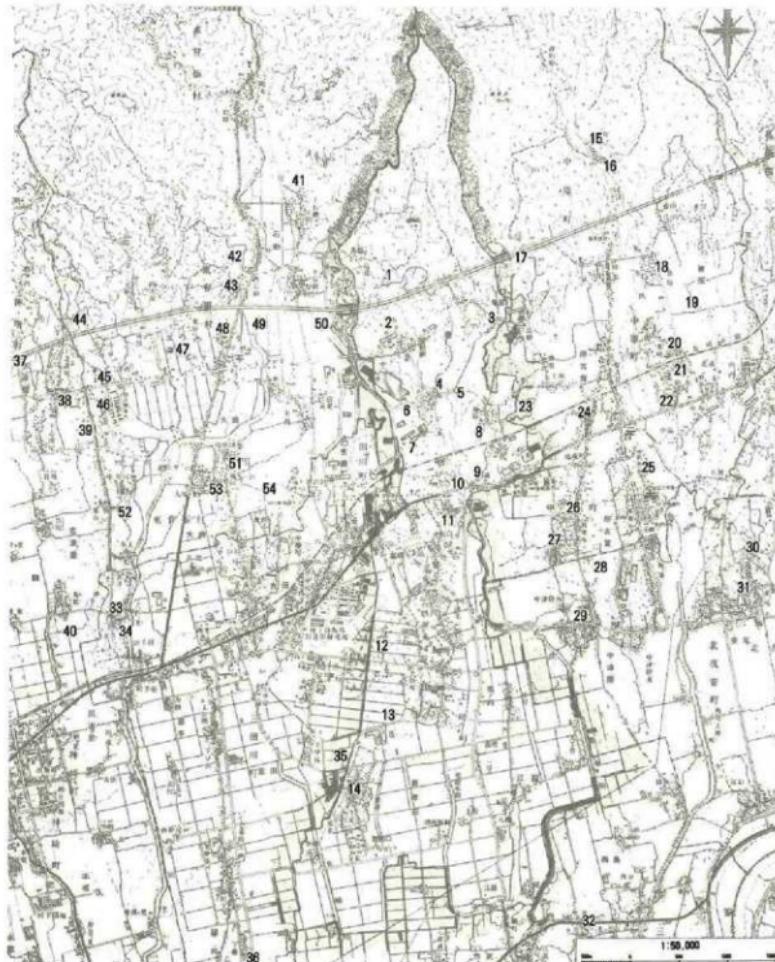
周知のことである。旧三根郡に属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町南地部の米多地区、坊所地区の丘陵部は、中世以降集落として発達し早くから宅地化が進み、本格的な調査例に乏しくその内容を詳細に把握できていないのが現状である。これに対し、町北部の堤地区周辺は、近年の大型開発に伴い広範囲の遺跡が調査の対象となっており、当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的遺跡としては、豪棺墓から細形銅劍や貝釧を出土した切通遺跡¹³⁾、神崎郡東脊振村・三田川町にまたがる佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い豪棺墓、土壙墓約300基が調査され舶載鏡、仿製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡¹⁴⁾・五本谷遺跡¹⁵⁾、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡¹⁶⁾、地区運動公園整備に伴う調査で5世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の豪棺墓が検出された船石遺跡¹⁷⁾などが知られている。またこの度の県営農業基盤整備事業に伴う調査においても船石南遺跡¹⁸⁾・船石遺跡¹⁹⁾から住居址や豪棺墓などが検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時には中原町姫方原遺跡²⁰⁾・五本谷遺跡などで方形周溝墓が營まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から大和町にかけての山麓部や丘陵部に前方後円墳が出現する。鳥栖市劍塚古墳²¹⁾、中原町姫方古墳²²⁾、上峰町から三田川町にまたがる目達原古墳群²³⁾、神崎町伊勢塚古墳²⁴⁾、佐賀市銚子塚古墳²⁵⁾、大和町船塚古墳など佐賀県東部の代表的古墳が築かれる。後期になると、現在長崎自動車道や、県道鳥栖-川久保線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』に見える三根郡米多郷に属する当時の上峰町一带は、「古事記」の記事によれば、応神天皇の曾孫にあたる「都紀女加」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南部の米多地区から三田川町の目達原一帯にあつたと想定されている。町内の主要な古墳としては、米多国造一族の墳墓として、5世紀代後半に形成されたと考えられる前方後円墳7基ほか円墳数基からなる目達原古墳群²⁶⁾、同じく5世紀代の古墳で蛇行状鉄劍、鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳1～3号墳²⁷⁾が知られている。また、後期の群集墳としては、町北部の鶴西山の周辺山麓部を中心に古墳群が存在している。一方、この時期の集落は、三田川町下中村遺跡²⁸⁾、東脊振村下石動遺跡²⁹⁾などが知られているが、弥生時代集落の調査例に比べると少なく、いまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみて、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的調査例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中村遺跡、東脊振村辛上廐寺跡³⁰⁾、靈仙寺跡³¹⁾などが著名であるが、まとまった調査例が少なく実態はあまり解明されていない。当時の造構として大規模なものは、佐賀平野にしかれた条里制の造構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。また大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土塁³²⁾や塔の塚原寺跡³³⁾などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間を遮断する形で築かれた堤土塁は、版築工法をにより築かれた福岡県の水城に似た施設=「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、灌漑用水確保のための堤防であるとする説など議論がなされてきたが、近年の土塁の東方に接する八藤遺跡の調査において、土塁から一直線に八藤丘陵を横断する個溝状の造構が検出され³⁴⁾、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されるに至っている。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚原寺跡は、百済系單弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。一方、町内における奈良・平安時代の集落は、農業基盤整備



上峰町	11 一本谷遺跡	21 船方前方後円墳	31 東尾飼側出土遺跡	39 志波麗閣駆籠地古墳群	49 西石動遺跡
1 鶴西山南麓古墳群	12 目連殿古墳群	22 猪原原道跡	32 三根町	40 馬那遺跡	50 下石動遺跡
2 星形原古墳群	13 塔の御殿寺跡	23 上地道跡	33 本文貝塚	41 山田谷古墳	51 板原道跡
3 谷渡古墳群	14 上米多貝塚	24 ドンドン落遺跡	34 三田川町	42 西石動古墳群	52 辛上高寺跡
4 墓土恩跡	中原町	25 町前道跡	35 吉野ヶ里丘丘陵遺跡	43 西石動叢文層帶土地	53 大冢遺跡
5 八藤遺跡	15 山田麻骨器出土土地	26 天神道跡	36 日本馬木道跡	44 横田道跡	54 横田道跡
6 五本谷遺跡	16 山田古墳群	27 西寒水道跡	37 下平貝塚	45 三津永田道路	
7 二家山遺跡	17 大堀古墳	28 宝満谷遺跡	38 伊勢塚	46 下三津前方後円墳	
8 船石遺跡	18 八幡社遺跡	29 宝満宮前方後円墳	39 志波麗六本松遺跡	47 クケ里遺跡	
9 船石南遺跡	19 萩原道跡	30 大塚古墳	40 伊勢塚前方後円墳	48 西一本松遺跡	
10 切通道跡	20 鹿方道跡				

Fig. 2 八藤遺跡の位置および周辺遺跡 (1/50,000)

事業に伴う調査などで、八幡遺跡、坊所一本谷遺跡³⁰などでまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られており、江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が、坊所城跡³¹では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と呼ぶふさわしい地域といえる。

註

- 1) 藤瀬祐博・石橋新次『袖北遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書』鳥栖市文化財調査報告書第30集 鳥栖市教育委員会 1980
- 2) 木下巧・天本洋一『郷方遺跡』佐賀県文化財調査報告書第30集 佐賀県教育委員会 1974
- 3) 七田忠昭『検見谷遺跡』北茂安町文化財調査報告書第2集 北茂安町教育委員会 1986
- 4) 金門丈夫・坪井清足・金闇恕『佐賀県三津永田遺跡』『日本農耕文化の生成』日本考古学協会 1961
- 5) 桑原幸則『環濠集落 吉野ヶ里遺跡 概報』佐賀県教育委員会 1990
- 6) 平成4年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 7) 七田忠志『原始』『上峰村史』上峰村 1979
- 8) 下山正一・西田民雄『II. 佐賀県上峰町周辺の地形と地質』『佐賀平野の阿蘇4火峰流と埋没林』上峰町文化財調査報告書第11集 上峰町教育委員会 1994
- 9) 高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋『香田遺跡』『香田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書2 佐賀県文化財調査報告書第57集 佐賀県教育委員会 1981
- 10) 七田忠志『佐賀県戦場ヶ谷遺跡』『史前学雑誌』6-2・4 1934
- 11) 原田大介『船石遺跡V』上峰町文化財調査報告書第12集 上峰町教育委員会 1995
- 12) 平成2年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 13) 金門丈夫・金闇恕・原口正三『佐賀県切通遺跡』『日本農耕文化の生成』日本考古学協会 1961
- 14) 高島忠平・七田忠昭他『二塚山遺跡』『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
- 15) 木下巧・七田忠昭『五本谷遺跡』『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
- 16) 七田忠昭『一本谷遺跡』上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 17) 七田忠昭『船石遺跡』上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 18) 昭和60、62年度、上峰村教育委員会調査、整理中
- 19) 鶴田浩二・原田大介『船石遺跡II 図録編』上峰村文化財調査報告書第6集 上峰村教育委員会 1988
鶴田浩二・原田大介『船石遺跡II 本文編』上峰村文化財調査報告書第7集 上峰村教育委員会 1989
- 20) 木下巧他『郷方原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第33集 佐賀県教育委員会 1976
- 21) 石橋新次『劍原前方後円墳』鳥栖市文化財調査報告書第22集 鳥栖市教育委員会 1984
- 22) 前出(3)
- 23) 松尾祐作『日造原古墳群調査報告 佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第9輯 佐賀県教育委員会 1950
- 24) 木下之治『古代国家の形成』『佐賀県史』佐賀県 1968
- 25) 木下之治編『銚子塚』佐賀市教育委員会 1976
- 26) 前出(23)
- 27) 前出(17)
- 28) 七田忠昭・高山久美子・西田和己『下中枕遺跡』佐賀県文化財調査報告書第54集 佐賀県教育委員会 1980
- 29) 高瀬哲郎他『下石動遺跡』『下石動遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書6 佐賀県文化財調査報告書第86集 佐賀県教育委員会 1987
- 30) 松尾祐作『東有振村辛上庵寺跡の調査』『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第5輯 佐賀県 1936

- 31) 田平徳栄他 「靈仙寺跡」 東脊振村文化財調査報告書第4集 東脊振村教育委員会 1980
- 32) 高島忠平・杠一義 「堤土里跡」 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1978
- 33) 桜尾操作 「塔の塚庵寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第7輯 佐賀県 1940
- 34) 平成2、3、4年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 35) 平成5、6年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 36) 原田大介 「坊所城跡」 上峰町文化財調査報告書第10集 上峰町教育委員会 1992

II. 調査の経過

1. 調査に至る経緯

上峰町は、昭和30年代までは純農村として、近世以来の水田耕作を主とした農業経営が連続として行われてきた。しかし、戦後の激変する社会・産業の構造は、労働力の都市部への流出などを招き、旧来の農業経営による農家経済を圧迫する事態となった。この農家経済の行き詰まりの打開のためには、近代的な大型圃場と農地の集団化を併せ行い、高度の農業生産技術と大型機械の一貫作業体系の導入により、労働生産性の向上と農業経営の合理化による農家所得の増大を図る必要があった。佐賀県では、昭和38年度より県営農業基盤整備事業の計画が策定され、昭和41年度より事業が開始された。上峰町においても、昭和42年度にモデル事業として町南部の荒地区を対象に事業が実施され、昭和46年度以後国道34号線以南の町南部の圃場を対象に事業が実施された。

一方、国道34号線以北の大字堤地区の耕地は、洪積世丘陵と切通川本支流の開析谷底平野からなっており、地区的1戸当たりの平均耕地面積は約0.6haと県平均を下回り、用水源には河川、溜池があてられていたが、いずれも用水確保が不十分であり、慢性的な用水不足を来していた。また、圃場は不整形で散在し、道路は狭く未整備で機械導入も困難で圃場条件は極めて悪かった。このため、昭和58年度より、堤地区を対象とした上峰北部農業基盤整備事業の実施に向けた調査計画が開始され、昭和60年度より事業が実施されるに至った。

しかし、地形的制約の上に成り立ってきた従来の耕地の集団化、道路・用排水路の整備を目的とした農業基盤整備事業の実施は、一方では土地の大規模な改変を必要とし、ひいては地下の埋蔵文化財に工事の影響を及ぼすことが予想され、今日的要と埋蔵文化財の保護との調整という問題が文化財保護行政の大きな課題となった。そこで、佐賀県においては、農業基盤整備事業と共に伴う埋蔵文化財の保護との調整について、県農林部と県教育委員会との間で「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」(昭和53年4月締結、昭和59年4月一部改正。)という覚書を交わし、現在この確認事項に基づき、県農林部、県教育委員会、市町村土地改良担当課、市町村教育委員会の関係機関四者による協議が行われ、調整が行われている。

上峰北部農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する協議調整は、昭和59年9月に、県事業担当部局から県教育委員会に昭和60年度農業基盤整備事業施工計画が提出され、JR長崎本線以南の埋蔵文化財の取扱について協議されたことに始まる。

昭和63年10月18日、「昭和64年農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第1回協議会」が開催された。その席上、昭和64年度(平成元年度)農業基盤整備事業として、屋形原地区の事業計画が提示され、あわせて今回の八藤遺跡1~3区を含む堤地区一帯について埋蔵文化財の確認調査を実施することとなった。

確認調査は、農業基盤整備事業施工予定地内の屋形原集落南側、堤集落周辺の田面、耕地を対象に、稲刈り終了をまって実施された。調査は、2m×2mの試掘溝を約20m間隔で設定し、実施した。試掘溝136ヶ所による調査で約40,000m²におよぶ遺跡の広がりを確認した。

昭和63年12月20日、確認調査の結果に基づいて「第2回協議会」が開催された。本席上では、屋形原地区の確認調査で検出された7,500m²の包蔵地について協議が行われ、事業の設計変更による調査面積の縮小など文化財の保護に関する調整を進めていた。平成元年6月、発掘調査着手直前になり、農業基盤整備事業自体の調整がとれず、屋形原地区を対象とした事業は先送りされることとなった。これを受けて平成元年度の事業について改めて四者協議がもたれ、急遽、代替地区としてそれまでに埋蔵文化財の確認調査を終えていた船石地区北西部から堤地区南東部一帯の耕地を対象に農業基盤整備事業が実施されることとなり、大字堤二本谷所在の船石遺跡およ

び字八藤所在の八藤遺跡の2遺跡について、水田基盤造成工事、水路掘削工事などで地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲を事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することになった。

2. 調査の経過

平成元年度の佐賀県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の発掘調査は、水田基盤造成工事により面的に削平が予定される部分3,660m²を便宜的に1区1,300m²、2区2,360m²に分割し、水路の設置により掘削が及ぶ部分140m²を3区として実施した。調査は、平成元年9月25日に着手し、翌平成2年1月26日まで現地での作業を行った。以下、簡略に調査経過を記す。

- 9月25日 下草の伐採作業の終了をまって、面的に削平を受ける1、2区の南部より重機による表土剥ぎ作業を開始する。早くも甕棺墓が検出された。表土剥ぎ作業は、1区は10月2日まで、2区は10月3日より15日まで、3区は10月16日に実施した。
- 10月19日 表土剥ぎ作業終後、発掘器材の搬入、テント設営等の調査の準備作業を行う。
- 23日 本日より作業員による作業を開始する。2区南部から遺構検出作業に着手する。この地区的遺構検出作業で甕棺墓あるいは墓壙と考えられる遺構が20基ほど検出された。
- 26日 磁北を基準としたグリッドを設定、測量杭打ち作業を行う(27日まで)。
- 30日～11月6日 町政施工記念行事・町民祭等の町行事のために作業中止。
- 11月7日 遺構検出作業再開、検出作業範囲を2区北東部に移す。この地区からは、直径1.5m前後の樹木(ミカン?)の植栽跡はじめ近年の耕作に伴う掘り込みが多数が検出された。遺構としては、竪穴式住居址ほか土壤などが少數検出され、検出された遺構から逐次掘り下げを進める。
- 14日 2区北東部の遺構から実測作業に着手。
- 16日 3区の調査に着手、遺構検出、掘り下げ作業。17日遺構実測作業。18日写真撮影を終え、3区の調査を終了。
- 11月後半～12月前半 2区北東部の遺構掘り下げを進める。この間、一部に赤土の盛土が堆積していることが判明し、12月5日より8日まで、重機による盛土の除去作業を行った。
- 12月8日 農業基盤整備工事と調査の工程について協議を行う。2区北東部を年末までに終了し工事側へ引き渡すこと、調査期間を1月末までとすることなどを確認した。
- 12日～ 2区南部に集中する甕棺墓群の発掘作業に着手する。6基に人骨遺存を確認。
- 20日 2区北東部、2区南部甕棺墓集中部分の気球による写真撮影を行う。写真撮影後、1区の遺構検出作業に着手、検出された遺構から逐次掘り下げ、実測を行う。
- 21日～ 2区甕棺墓群の実測作業に着手する。
- 27日 2区北東部工事側へ引き渡し。年内の作業を終了する。(～1月4日作業休業)
- 1月5日 長崎大学松下助教授、甕棺出土人骨調査。
- 10日 1区の遺構掘り下げ作業終了
- 17日 1区の気球による写真撮影を行う。
- 19日 甕棺墓群の調査終了。
- 26日 実測作業を終了、午後器材の撤収を行い現場でのすべての作業を終了し、現場を工事側へ引き渡す。この後、2月2日より7日まで船石文化財整理事務所にて、出土遺物の水洗作業を行った。

II. 遺跡の概要

1. 遺跡の概要 (Fig. 3)

八藤遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字八藤、迎原の標高20m～35mの洪積段丘〔「八藤丘陵」と呼称する。〕上に位置している。遺跡が立地する八藤丘陵は、東を切通川の支流である大谷川に、西を切通川本流および支流の大鳥居川にそれぞれ開析され、南北に延びる舌状の丘陵となっている。

遺跡は、これまででは、「上峰村史」¹⁾の縄文時代の項に、「堤東遺跡」、「堤東丘陵」出土遺物として、曾畠式土器、阿高式土器、石斧や石匙の採取が紹介されている程度で学術的調査の前例がなく、大字堤字八藤地区に位置する丘陵先端部のみが「八藤遺跡・縄文時代・散布地」として『佐賀県遺跡地図』²⁾に周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていた。

しかし、昭和63年に実施した、昭和64年度農業基盤整備事業施工予定地区内文化財確認調査によって、弥生時代から奈良・平安期までの遺構が確認され、北方の新立古墳群が立地する高位段丘面までの字迎原地区的低位丘陵面全域に遺跡の広がりが確認され、これまで農業基盤整備事業に伴い調査を実施してきた船石遺跡と同様、大規模な複合遺跡であることが判明した³⁾。

一方、本遺跡が所在する大字堤地区一帯には、各段丘上に著名な遺跡が分布している。八藤丘陵と西方の二塚山丘陵のあいだには奈良時代の堤土壙跡⁴⁾が、八藤丘陵の東側には、前述のように大谷川の谷水田を挟んだ船石丘陵上に船石遺跡⁵⁾が、また、西側には墨形原遺跡⁶⁾、更に西方の二塚山丘陵城には佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い調査が行われた二塚山遺跡⁷⁾、五本谷遺跡⁸⁾、切通遺跡⁹⁾など弥生時代遺跡を中心に縄文時代から奈良・平安期の遺跡群が展開している。

2. 調査区の概要 (Fig. 3・4)

今回の調査の対象となった八藤遺跡1区～3区は、平成元年度県営農業基盤整備事業施工区域のうち、上峰町大字堤字八藤の標高20m～25m付近の低位段丘面に位置し、主に畠地として利用されていたが、現在は一部を残して荒れ地となり竹が生い茂っている。調査区域は堤集落と船石集落を結ぶ町道以南の八藤丘陵先端部分にあたり、調査区の南約100mの地点で丘陵の東西を南流する切通川とその支流の大谷川が合流する。

本地区の低位段丘面は、東から西に向かって傾斜しており、調査区ほぼ中央に東西に設定した5グリッドのライン東部が標高約23.5m、西部が標高約20mで約3.5mの比高差がある。また、丘陵の西側は切通川の沖積面では小段丘を経由し比較的緩やかな傾斜で移行するが、丘陵東側は大谷川の沖積面との間に比高約3mの段丘崖が発達している。2区の丘陵東辺で検出された土壙、甕棺墓は、崖によって一部を失っており、この段丘崖は、過去の大谷川の浸食作用により形成されたものと考えられる。

調査は、水田基盤造成工事により面的に削平を受ける部分3,660m²を便宜上1・2の2区に分割し、また、排水路設置工事で掘削が及ぶ部分140m²を3区として実施した。面工事の対象となる1・2区は、調査対象となる区域の北西部の一段低い畠部分(標高21.5m付近、1,300m²)を1区、1区の南および東側の荒れ地部分(標高22m～24m付近、2,360m²)を2区として設定した。

調査区域は、1・2区が東西約65m、南北約90mの南から北に向かって開く逆三角形の地区、3区が1区北辺から北に約50m、西に約20m付近の東西約30m、南北約4mの東西に細長い矩形の区域で、ここに磁北を基準として、南北列北から4～11の16列、東西列東からa～Kの12列の10m×10mグリッドを設定した。調査区域の

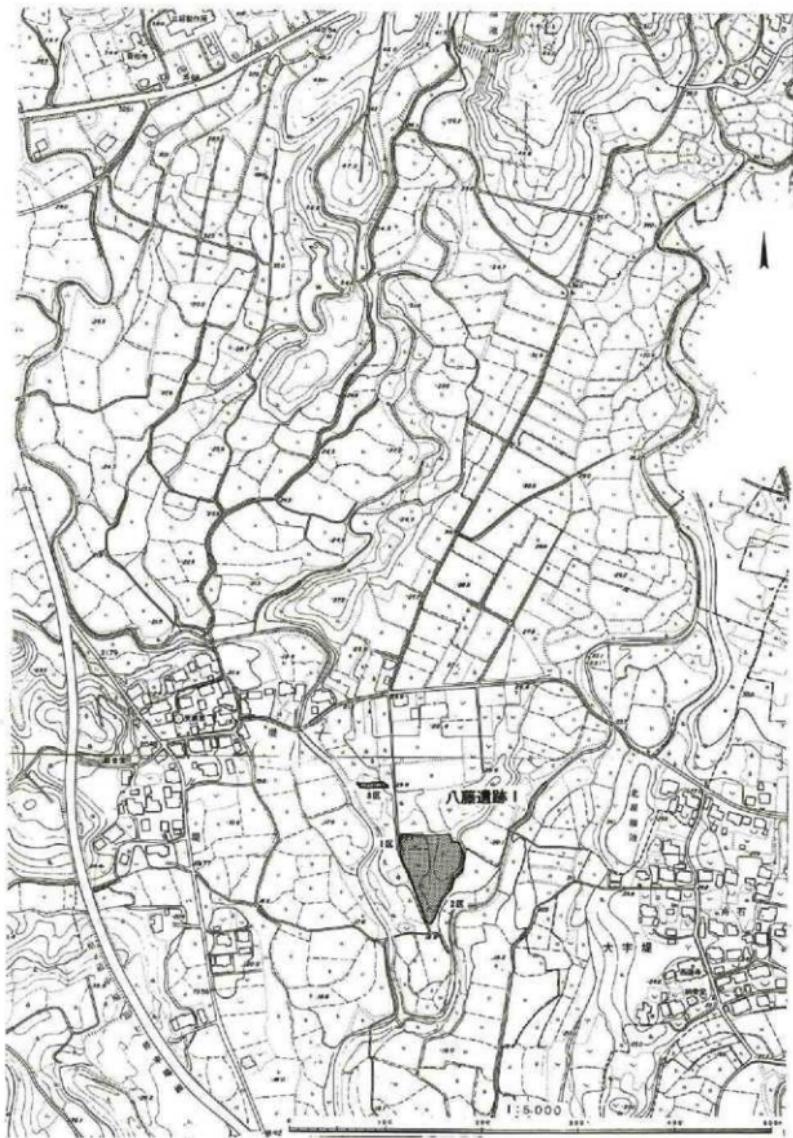


Fig. 3 八幡遺跡周辺地形図および調査区域位置図 (1/5,000)



Fig. 4 八藤遺跡 1～3区遺構配置図 (1/500)

土層は、後世の耕作により各地代の遺物包含層は失われ、耕作土あるいは表土直下が洪積世段丘を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

調査区域の北西部にあたる1区は、近年の耕作によって上部が削平されており、ここからは、掘立柱建物址と考えられる遺構が1棟、そのほか、溝跡2条、土壤、ピットなどが検出されたにとどまった。2区は、畑の耕作跡と考えられる矩形の掘り込み、ミカンの植栽痕と考えられる直径1.5m前後の円形の掘り込み、クワの植栽痕と考えられる幅数十cmの溝など近年の耕作、植栽により著しく原状が損なわれている。ここからは、土壤、ピットのほかに、調査区域の南部の丘陵先端部分から弥生時代中期の甕棺墓28基が検出され、また、同区の北東部からは、D-3グリッド付近で弥生中期・古墳時代後期以降の整穴式住居址それぞれ1軒ずつが検出された。1・2区の低位段丘面より一段下位の段丘面に位置する3区では、古墳時代後期から奈良期の土師器、須恵器を含む浅い落ち込みを土壤として調査したが地山の凹地に堆積した遺物包含層の可能性も高い。

調査の結果、検出された遺構・遺物とともに甕棺墓群を除けば極めて少量ではあるものの、本遺跡が縄文時代から奈良時代までの複合遺跡であることが確認された。

註

- 1) 七田忠志「二 原始社会の発展（縄文時代）」「上峰村史」 上峰村 1979
- 2) 「佐賀県遺跡地図」 佐賀県教育委員会 1986
- 3) 桶口秀信・徳永貞紹「昭和63年度文化財確認調査の内容」「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書8」 佐賀県文化財調査報告書第98集 佐賀県教育委員会 1990
- 4) 高島忠平・杠一義「堤土墨跡」 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1978
- 5) 七田忠昭「船石遺跡」 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 5) 鶴田浩二・原田大介「船石遺跡II 図録編」 上峰村文化財調査報告書第6集 上峰村教育委員会 1988
- 5) 鶴田浩二・原田大介「船石遺跡II 本文編」 上峰村文化財調査報告書第7集 上峰村教育委員会 1989
- 5) 原田大介「2. 船石遺跡」「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書7」 佐賀県文化財調査報告書第94集 佐賀県教育委員会 1989
- 5) 原田大介「6. 船石遺跡8・9・10区」「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書8」 佐賀県文化財調査報告書第98集 佐賀県教育委員会 1990
- 5) 原田大介「3. 船石南遺跡」「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書7」 佐賀県文化財調査報告書第94集 佐賀県教育委員会 1989
- 6) 杠一義「屋形原遺跡」 上峰村文化財調査報告書第二集 上峰村教育委員会 1979
- 6) 桶口秀信・徳永貞紹「昭和63年度文化財確認調査の内容」「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書8」 佐賀県文化財調査報告書第98集 佐賀県教育委員会 1990
- 7) 高島忠平・七田忠昭他「二塚山」 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会
- 8) 金関丈夫・金関惣一・原口正三「佐賀県切通遺跡」「日本農耕文化の生成」 日本考古学協会 1961

IV. 遺構

本遺跡は、過去の調査においてまとまった調査の例がなく、今回の農業基盤整備事業に伴う発掘調査までは、今回の調査対象区域となった堤集落と船石集落を結ぶ町道以南の字八藤地区の丘陵先端部分が縄文時代の遺物散布地として『佐賀県遺跡地図』に登録された周知の埋蔵文化財包蔵地であった。そして、昭和63年度の農業基盤整備事業に伴う文化財確認調査において、字迎原地区の丘陵部分にも縄文時代から奈良・平安期の遺構・遺物が検出され、複合遺跡であることが確認されたことは、前述のとおりである。

今回の現場における調査の時点での遺構として発掘作業を行ったものは、竪穴式住居址2軒、貯蔵穴などの土壙49基、甕棺墓28基、溝跡2条の合計81遺構とその他のピットである。それに圓面整理中に遺構として認定した1区、F-4 Gr. 付近の掘立柱建物址1棟がある。

ここでは、竪穴式住居址2軒・掘立柱建物址1棟・土壙など49基・甕棺墓28基・溝跡2条について報告したい。

1. 竪穴式住居址 (Fig. 5 • PL. 3, 4)

今回の調査で検出された竪穴式住居址と考えられる遺構は、2区C-3, D-3 Gr. で重複して検出された SH-241・SH-242の2軒である。

SH-241 (Fig. 5 • PL. 3-3)

SH-241は、2区C-3, D-3 Gr. で検出された竪穴式住居址で、西半分を1区との境界である畠の段により失っている。プランは、遺存部より推定すると、一辺5.2mの正方形を呈すものと考えられる。主柱穴は、畠の段の下部から検出されピットを含む4本。北壁中央に焼土の分布が見られるが、カマドの袖などが全く無いところから、移動式のカマドが使用されたものと考えられる。東壁、南壁際の一部に幅8cm前後の壁周溝がめぐっている。推定主軸は、N-5°-Wである。

SH-242 (Fig. 5 • PL. 4-1)

SH-242も、SH-241に切られた形で、2区C-3, D-3 Gr. で検出された竪穴式住居址で、SH-241と同様に西半分を1区との境界である畠の段により失っている。プランは、不整の長方形を呈すものと考えられる。規模は遺存部分で南北長約5.8mを計る。SH-241および後世の耕作により床面以上が失われ掘方のみ遺存している。推定主軸は、N-20°-Eである。

2. 掘立柱建物址 (Fig. 5)

今回の調査で検出された掘立柱建物址は、圓面整理段階で確認されたSB-120のみである。

SB-120 (Fig. 5)

SB-120は、E-4, F-4 Gr. に位置する掘立柱建物址と考えられる遺構である。1間×1間の4本柱の建物で、柱穴は、それぞれ直径45cm~60cmの不整円形の掘り込みで、柱が据えられていたと考えられる部分がさらに一段掘りくぼめられ、二段掘りの柱穴となっている。規模は、桁行4.2m、梁行3.3m、床面積13.9m²を計る。主軸はN-21°-Eである。

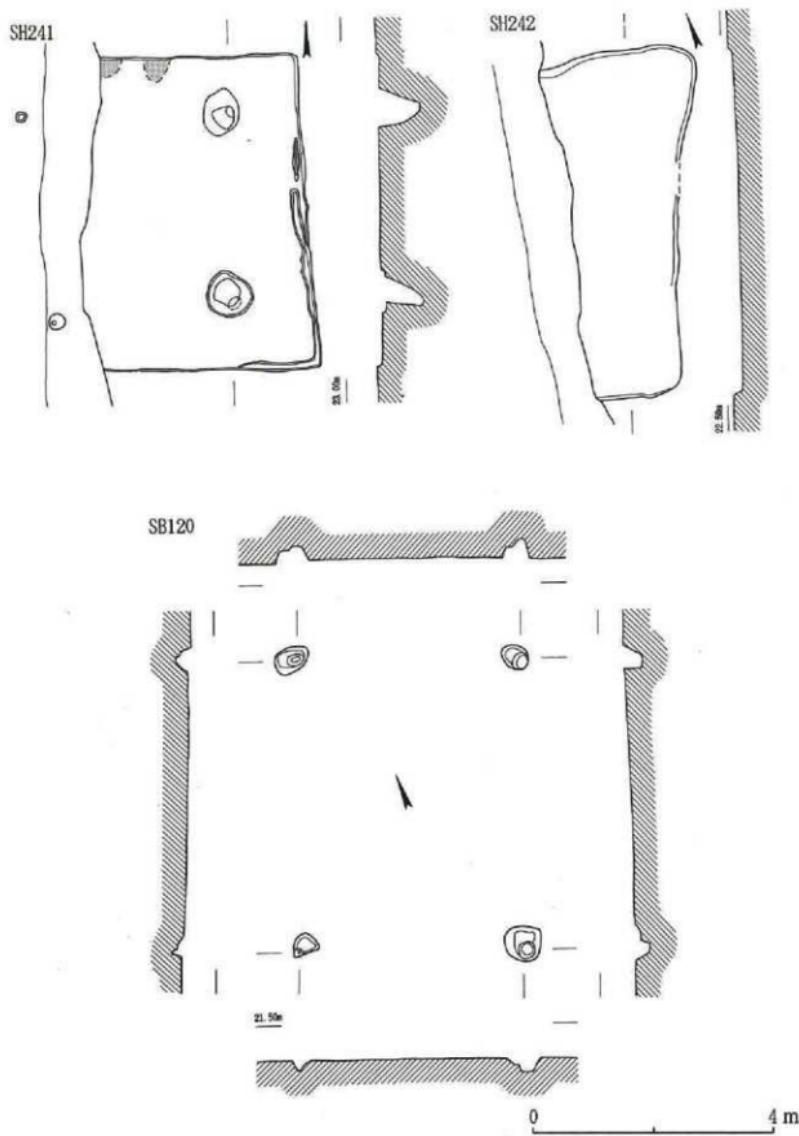


Fig. 5 穹穴式住居址・掘立柱建物址実測図 SH-241・SH-242・SB-120 (1/80)

3. 土壙・貯藏穴 (Fig. 6~9・PL. 5~9・Tab. 1)

今回の調査で検出された土壙は、49基であった。これらは、後世の削平により上部を失ったものか比較的浅いものが多い。平面形態により、SK-102、SK-105、SK-108、SK-202、SK-245、SK-260、SK-267、SK-270など方形を基調としたプランのものと、SK-106、SK-111、SK-112、SX-117、SK-201、SK-261など円形を基調としたプランのものとに分類できる。さらに、この二者のほか、SX-101、SK-103、SK-107、SK-239、SK-240、SK-247、SK-262、SK-301など不整形のプランを呈し掘り方も不規則なもの一群が認められる。また、SK-110、SK-114、SK-115、SK-244、SK-245などは、土壙の床面中央にピットをもち「落とし穴」の土壙と考えられる。

今回の調査では、袋状土壙は検出されなかった。

検出された各土壙の規模・深さ等の法量、及び出土遺物は下記一覧表にまとめた。

Tab. 1 八藤遺跡出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模(上段…上面、下段…底面、単位:m・m ²)				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・直径	幅・直径	深さ	底面積			
SK-101	不整形	1.55 0.99	0.72 0.38	0.74	0.4			
SK-102	不整形	0.97 0.85	0.88 0.76	0.21	(0.5)			
SK-103	不整形	2.11 1.72	1.36 0.48	0.38	1.0			
SK-104	不整形	1.15 1.04	0.67 0.58	0.12	0.4			
SK-105	不整方形	0.97 0.83	1.76 0.48	0.13	0.5			
SK-106	不整円形	0.83 0.69	0.82 0.67	0.13	0.4			
SK-107	不整形	2.77 2.46	1.33 0.88	0.12	1.8			
SK-108	方形	1.10 0.98	0.80 0.72	0.10	0.7			
SK-109	不整形	1.58 0.89	0.73 0.50	0.27	0.3			
SK-110	不整椭円形	0.94 0.75	0.66 0.49	0.14	0.3	中央にピット	網文式土器片	
SK-111	不整円形	1.42 1.06	1.42 1.24	0.23	1.0		土師器破	
SK-112	不整円形	0.76 0.51	0.69 0.48	0.11	0.2			
SK-113	不整椭円形	0.76 0.62	0.45 0.38	0.14	0.1			

道橋 番号	平面 形態	規模(上段…上面、下段…底面、単位:m・m ²)				柱穴状の ビットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SX-114	不整橢円形	1.36 1.16	0.98 0.73	0.22	0.6	中央にビット		
SK-115	不整橢円形	1.08 0.84	0.78 0.57	0.15	0.4	中央にビット		
SK-116	不整円形	0.70 0.45	0.68 0.38	0.44	0.2			
SK-117	不整円形	1.18 0.92	1.04 0.80	0.10	0.6			
SK-201	円形	0.64 0.52	0.54 0.48	0.09	0.2			
SK-202	隅丸長方形	1.37 1.23	0.68 0.56	0.15	0.6			
SK-204	不整円形	1.40 0.40	0.95 0.44	0.38	0.1			
SK-205	円形	0.78 0.24	0.70 0.12	0.56	0.1			
SK-206	不整形	1.06 0.82	0.60 0.36	0.31	0.2			
SK-236	不整形	0.62 0.48	0.38 0.24	0.16	0.1			
SK-237	不整円形	1.88 1.80	1.50 0.68	0.27	0.7		土師器片	
SK-238	不整長方形	1.22 1.06	0.68 0.54	0.30	0.5			
SK-239	不整形	1.98 0.78	1.32 0.44	0.57	0.8			
SK-240	不整形	3.23 2.28	1.80 0.46	0.88	0.9		石匙	
SK-243	不整形	1.47 0.90	0.90 0.50	0.25	0.4			
SK-244	不整橢円形	1.12 1.02	0.72 0.60	0.15	0.5	中央にビット		
SK-245	隅丸長方形	1.36 1.31	0.73 0.66	0.56	0.8	中央にビット		
SK-246	不整円形	2.12 1.64	1.92 1.24	0.32	1.7			

遺構 番号	平面 形態	規模(上段…上面、下段…底面、単位:m・m ²)				柱穴状の ピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-247	不整形	2.50 1.34	1.58 0.44	0.43	0.5			
SK-248	不整形	0.83 0.47	0.55 0.40	0.16	0.2			
SK-249	不整構円形	(1.72) (1.32)	0.91 0.55	0.27	(0.8)			
SK-250	隅丸方形	1.44 0.82	1.27 0.52	0.10	0.5			
SK-251	不整形	(1.28) (0.96)	0.97 0.68	0.15	(0.6)			
SK-252	不整形	3.02 1.54	1.64 0.70	0.51	0.9			
SK-253	不整形	2.22 1.10	1.36 0.27	0.55	0.2			
SK-260	長方形	1.75 1.62	0.90 0.73	0.15	1.1			
SK-261	不整円形	1.30 0.78	1.07 0.51	0.14	0.3			
SK-262	不整形	1.90 1.70	1.80 0.90	0.24	1.2			
SK-263	不整形	1.43 1.34	1.34 1.24	0.09	1.2			
SK-264	橢円形	0.89 0.69	0.66 0.60	0.17	0.4			
SK-265	長方形	1.72 1.40	0.70 0.44	0.46	0.6			
SK-266	不整構円形	1.24 0.90	0.82 0.33	0.57	0.3			
SK-267	隅丸方形	1.70 1.37	1.40 0.98	0.43	1.2			
SK-270	不正方形	0.88 0.73	0.76 0.60	0.19	0.4			
SK-301	不整形	※3.10 ※3.04	3.04 2.67	0.11	※6.9		須恵器壺蓋片	
SK-302	不整形	1.36 1.27	1.08 0.93	0.07	(1.4)			

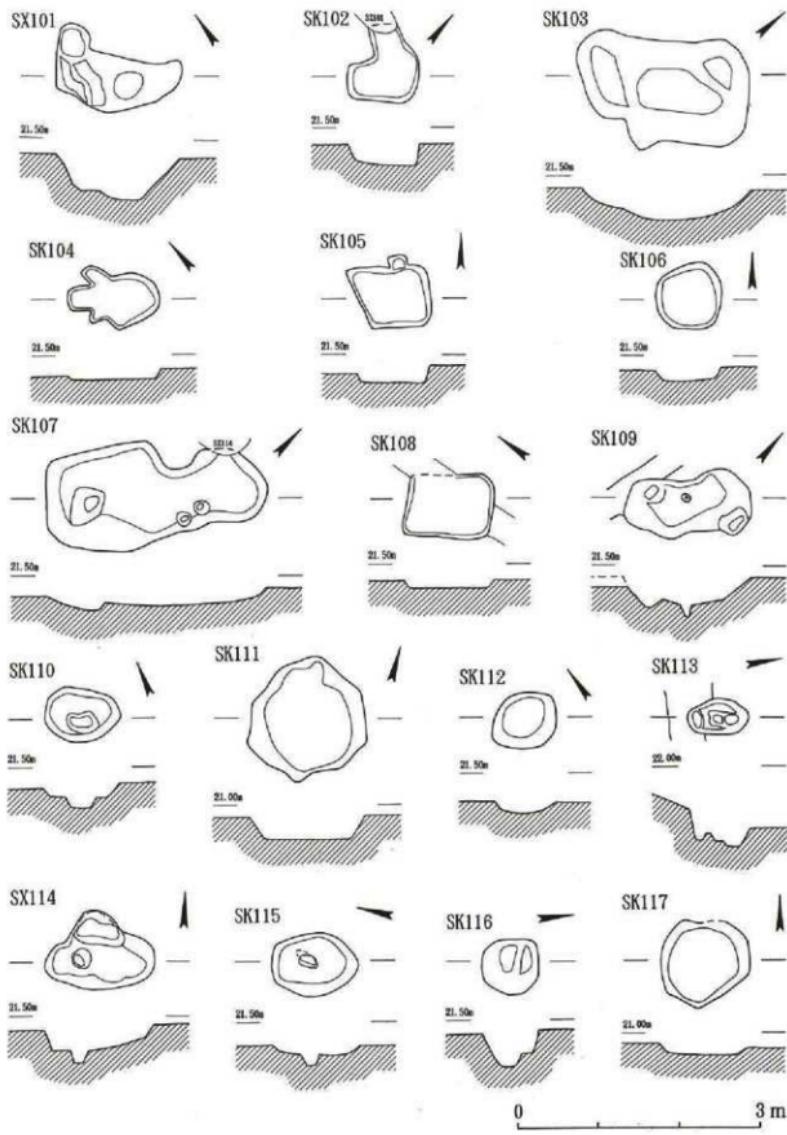


Fig. 6 土壤実測図 1 SX-101～SK-117 (1/60)

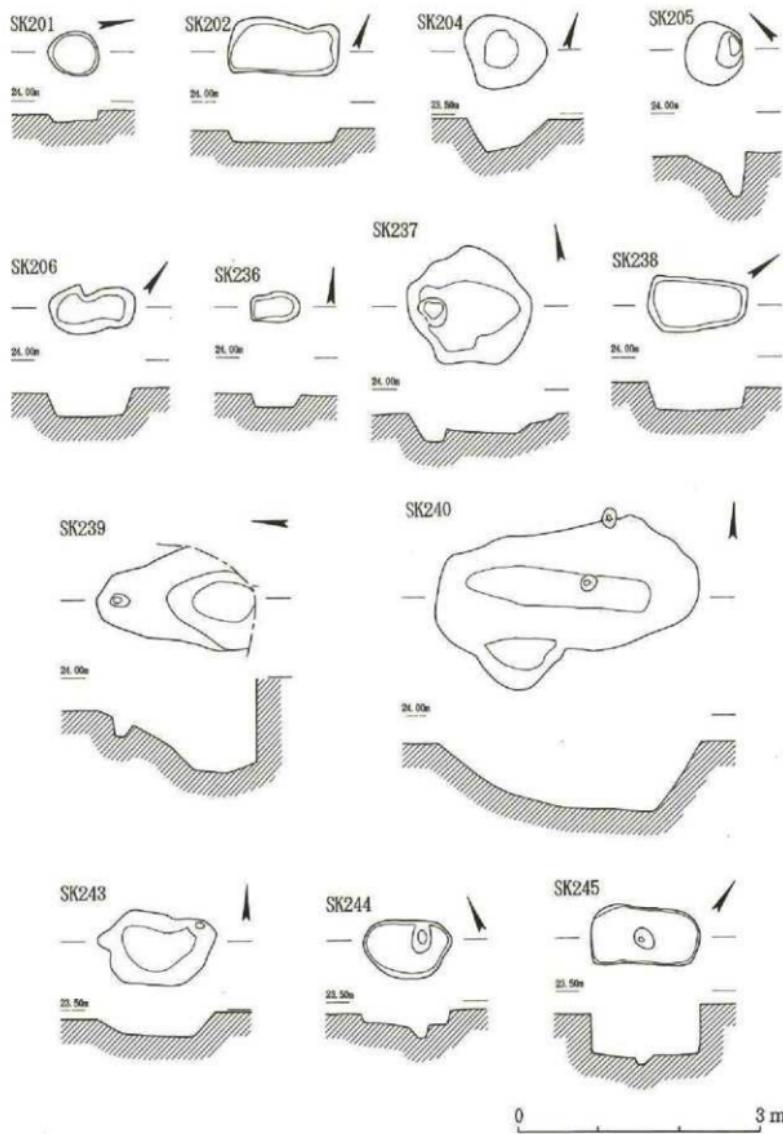


Fig. 7 土壤実測図 2 SK-201~SK-245 (1/60)

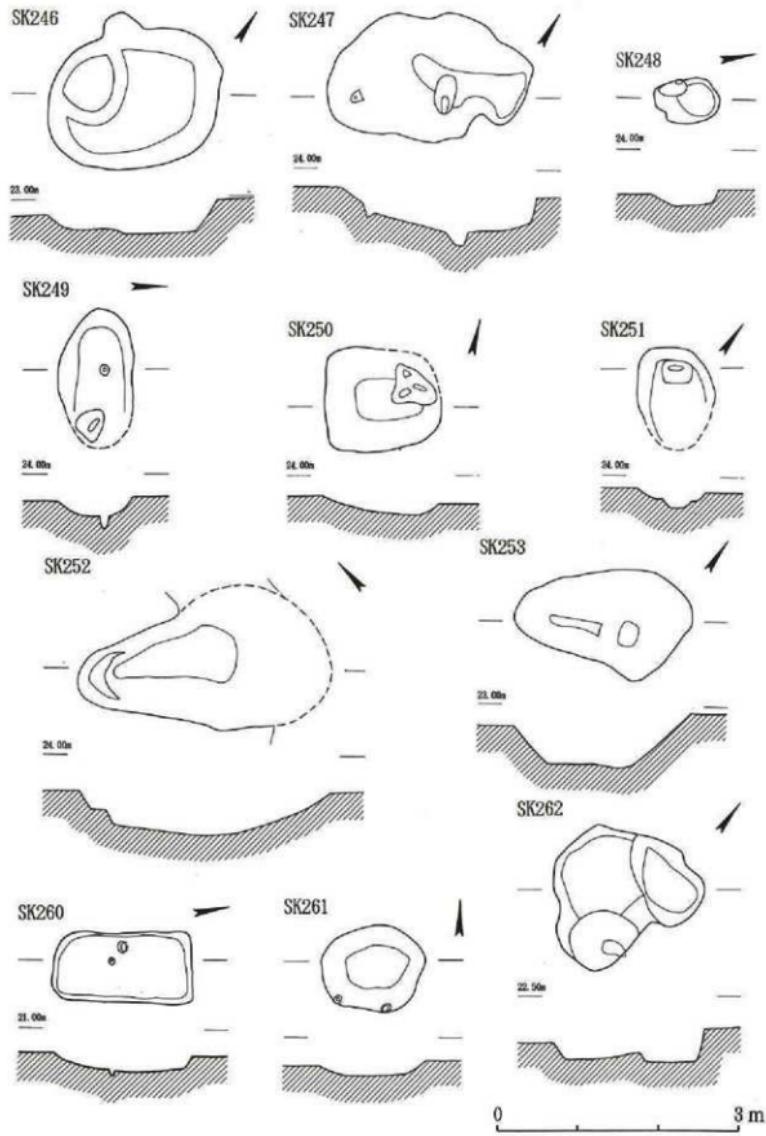


Fig. 8 土壌実測図 3 SK-246～SK-262 (1/60)

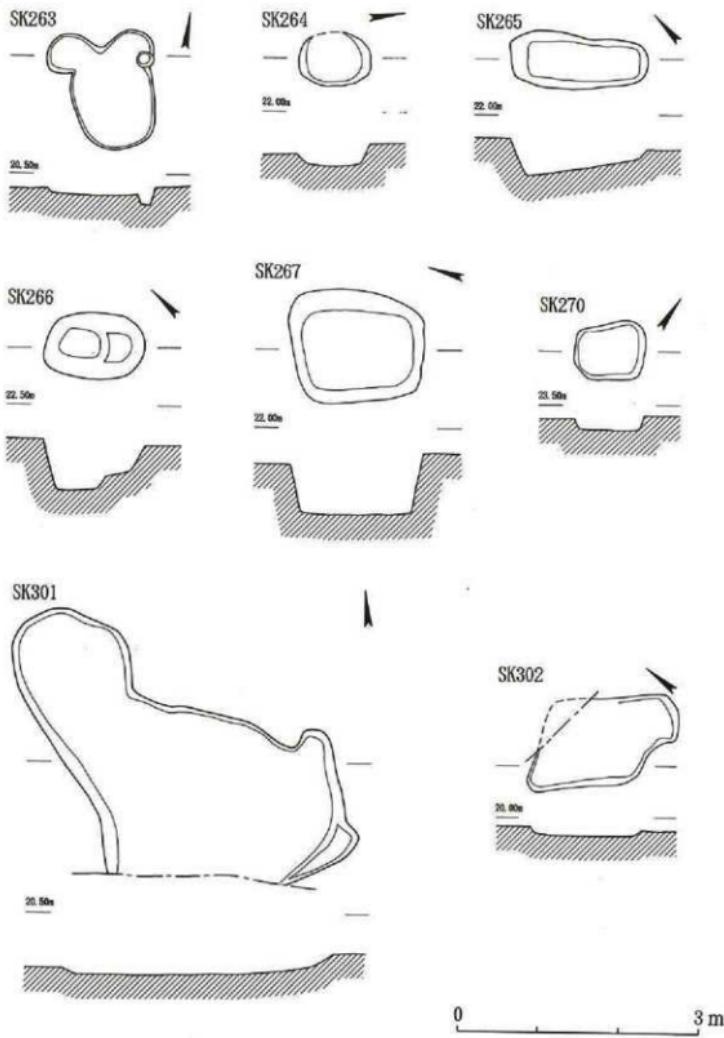


Fig. 9 土壤実測図 4 SK-263~SK-302 (1/60)

4. 溝跡 (Fig.10)

溝跡は、耕作、植栽に伴うと考えられるものは多数検出されたが、覆土の様子などからある程度古いものと考えられるものは、1区の西部で検出された東西溝2条のみである。いずれも出土遺物はなく、時期、性格共に不明である。

SD-118は、F-5 Gr. で検出された幅約1.5m、深さ10cm~20cm、延長約10mが確認された浅いU字溝で、ほぼ東西に延び調査区端部でやや南に折れている。SD-119は、F-3 Gr. で検出された幅約2m、深さ10cm~30cm、延長約14mが確認された浅いU字溝で、調査区内では一直線にほぼ東西に延びている。

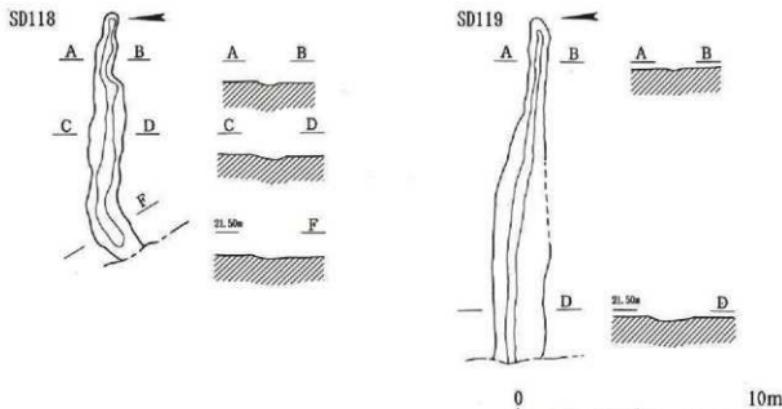


Fig.10 溝跡実測図 SD-118・SD-119 (1/200)

5. 壺棺墓 (Fig.11~31・PL. 9~12・Tab. 2)

今回の調査では、28基の壺棺墓と考えられる遺構が検出された。被葬者用別にみると、成人用11基、小児用17基に分類できる。壺棺墓の形式としては確認できたものはすべて、上下の壺と甕を組み合わせる複式棺である。また、上下の甕の組合せも、SJ-255が砲弾形の大型甕を下甕とし、これに上甕として截頭卵形の大型甕の口縁部を挿入したSJ-255以外は、ほとんど上下同一器種の接口式を探っている。

一方、壺棺墓の分布をみると、SJ-207を北限とし、丘陵南東部縁辺に集中しており、分布の範囲が南東方向に拡がることが予想されるが、丘陵東側を流れる大谷川の浸食によって少なからず消滅しているものと思われる。さらに、SJ-207、SJ-208はいずれも墓壙の底部にした甕の一部が残るのみで、この部分がかなりの深さで後世に削平されたことがうかがわれる。このようなことから、今回の調査で検出された壺棺墓は、A-5、B-5 Gr. 付近のSJ-207、SJ-208ほか消滅した一群（A群）、C-7、8 Gr. 付近のSJ-209~SJ-224の16基からなる一群（B群）、C-8、9 Gr. 付近のSJ-225、SJ-228、SJ-229、SJ-231、SJ-234、SJ-256からなる一群（C群）、そして丘陵最南端D-9 Gr. 付近に分布するSJ-226、SJ-227、SJ-235SJ-255からなる一群（D群）の、4群にグループングが可能である。さらにB群では、SJ-209、SJ-211、SJ-216、SJ-219およびSJ-210、SJ-212、SJ-214、SJ-235の二列、D群では、SJ-255、SJ-226、SJ-227が、それぞれN-20°-W、N-40°-W程度の軸で

列埋葬されている。

棺内部に副葬品をはじめとする遺物は皆無であったが、SJ-211、SJ-213、SJ-214、SJ-223、SJ-224、SJ-225からは頭骨、大腿骨、脛骨、腓骨などが出土している。

以下、調査した壇棺墓の概要を報告する。なお、記述中の主軸方位は上蓋を基準とした。

Tab. 2 八幡遺跡出土壇棺墓一覧表

壇棺墓番号	壇棺形式	組合せ器種 (上・下)	成人・小児用の別	墓壙規模 (m)	上蓋:一次埋葬 後:二次埋葬			方位 上蓋基準	傾斜	備考
					長さ	幅	深さ			
SJ-207	—	—・壇	小児用	0.25	0.17	1.11	N - (70)°W	—	—	—
SJ-208	—	—・壇	〃	0.57	0.36	0.23	N - 99°W	—	—	—
SJ-209	接口式	壇・壇	〃	1.30 0.85	0.63 0.47	0.40 0.57	N - 160°E	3°	—	—
SJ-210	〃	〃	〃	1.64 1.34	1.02 0.82	0.32 0.85	N - 172°E	-5°	粘土目張	—
SJ-211	〃	〃	成人用	1.97 2.01	1.37 1.15	0.49 0.92	N - 10°W	-2°	人骨遺存	—
SJ-212	〃	〃	小児用	1.04 1.09	0.95 0.58	0.45 0.74	N - 10°W	-6°	粘土目張	—
SJ-213	〃	〃	〃	1.65 1.51	0.93 0.91	0.54 0.71	N - 25°W	-8°	人骨遺存	—
SJ-214	〃	〃	成人用	2.20	1.40	0.46	N - 22°W	0°	人骨遺存	—
SJ-215	〃	〃	小児用	0.78	0.45	0.21	N - 15°W	—	—	—
SJ-216	〃	〃	成人用	2.52 2.01	1.40 0.87	0.33 0.58	N - 17°W	7°	—	—
SJ-217	〃	〃	小児用	—	—	0.39	N - 159°E	6°	SJ-219と同一墓壙に埋納	—
SJ-218	〃	〃	〃	—	—	(0.30)	N - 157°E	3°	SJ-219と同一墓壙に埋納	—
SJ-219	〃	〃	成人用	2.38 2.10	1.55 0.95	0.45 0.82	N - 162°E	-1°	SJ-217・SJ-218と同一墓壙に埋納	—
SJ-220	〃	〃	小児用	0.99	0.64	0.22	N - 94°W	-10°	SJ-219の墓壙を切る	—
SJ-221	〃	〃	〃	1.13 0.58	0.97 0.97	0.69 1.00	N - (39)°W	—	—	—
SJ-222	〃	〃	〃	(1.90)	(1.25)	0.25	N - 26°W	6°	SJ-223の墓壙を切る	—
SJ-223	〃	〃	成人用	2.62 2.09	1.38 1.38	0.30 0.88	N - 164°E	-3°	SJ-222が墓壙を切る人骨遺存	—
SJ-224	〃	〃	〃	2.00 2.23	0.85 0.83	0.21 0.72	N - 174°W	2°	人骨遺存	—
SJ-225	〃	〃	〃	(2.10) 2.05	1.22 0.79	0.94 1.18	N - 6°W	4°	人骨遺存 粘土目張	—
SJ-226	〃	〃	〃	1.78	1.22	1.26	N - 146°E	46°	—	—
SJ-227	〃	〃	〃	1.55 1.96	1.19 1.08	0.90 1.04	N - 40°W	-3°	—	—
SJ-228	〃	—・壇	〃	(1.40) 1.11	(0.80) 0.62	(0.41) 0.70	N - 176°W	40°	—	—
SJ-229	—	—・壇	小児用	0.61	0.52	0.12	—	—	—	—
SJ-231	接口式	—・壇	〃	1.05	0.66	0.17	N - 175°E	—	—	—
SJ-234	—	—・壇	〃	0.83	0.62	0.21	N - 100°E	—	—	—
SJ-235	—	壇?・—	〃	0.99	0.99	0.42	—	—	—	—
SJ-255	挿入式	壇・壇	成人用	2.33 1.86	1.67 1.02	0.99 1.32	N - 126°E	12°	—	—
SJ-256	—	壇・—	小児用	0.85 0.54	0.51 (0.70)	0.36 0.66	N - (31)°E	—	—	—

SJ-207 (Fig.11・PL. 9-3)

B-5 Gr. で検出された小児用壺棺墓である。後世の削平により下壺の底部が遺存するのみである。

SJ-208 (Fig.11・PL. 9-4)

A-6 Gr. で検出された小児用壺棺墓である。後世の削平により下壺の洞部が一部遺存するのみである。

SJ-209 (Fig.11・PL. 9-5)

C-7 Gr. で検出されたB群東列埋葬を構成する北端の小児用壺棺墓である。一次墓壙は、長軸1.30m、幅0.63m、深さ0.40mの梢円形に近い墓壙で、長軸方向にさらに長さ0.85m、幅0.47m、深さ0.17mの二次墓壙が掘り込まれている。壺棺は、上下ともに小型壺を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は3°、主軸はN-160°-Eを計る。

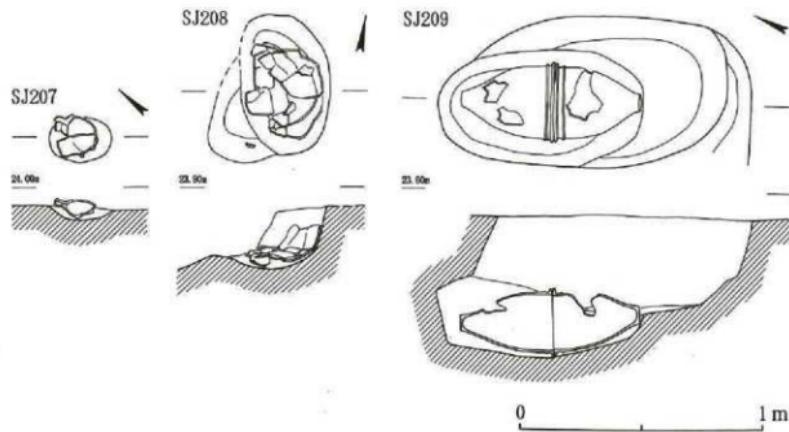


Fig.11 壺棺墓実測図 1 SJ-207・SJ-208・SJ-209 (1/20)

SJ-210 (Fig.11 + PL. 9 - 5)

C-7 Gr. で検出されたB群西列埋葬を構成する北端の小児用槨墓である。一次墓壙は、長さ1.64m、幅1.02m、深さ0.32mの隅丸胴張りの長方形を呈し、主軸方向にさらに長さ1.34m、幅0.82m、深さ0.53mの二次墓壙が掘り込まれている。槨棺は、上下ともに小型甕を使用した接口式の複式棺で、接合部は粘土による目張りが施されている。傾斜角度は-5°、主軸はN-172°-Eを計る。

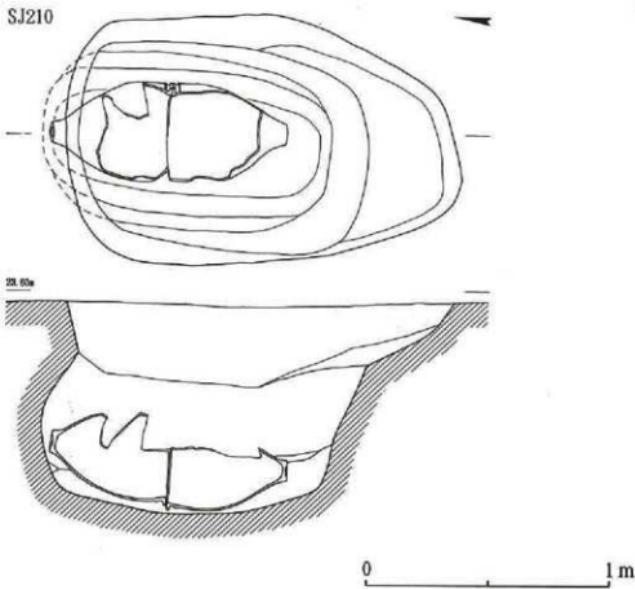


Fig.12 棺槨墓実測図 2 SJ-210 (1/20)

SJ-211 (Fig.13・PL. 9-7~9)

B-7 Gr.・C-7 Gr.の境界で検出されたB群東列埋葬を構成する成人用斎棺墓である。一次墓壙は、長さ1.97m、幅1.37m、深さ0.49mの圓丸長方形を呈し、主軸方向にさらに長さ2.01m、幅1.15m、深さ0.43mの二次墓壙が掘り込まれている。斎棺は、上下ともに大型蓋を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は-2°、主軸はN-10°-Wを計る。棺内には、下斎部分に頭骨、歯、上斎部分に大腿骨、脛骨、腓骨がそれぞれ一部遺存している。

SJ211

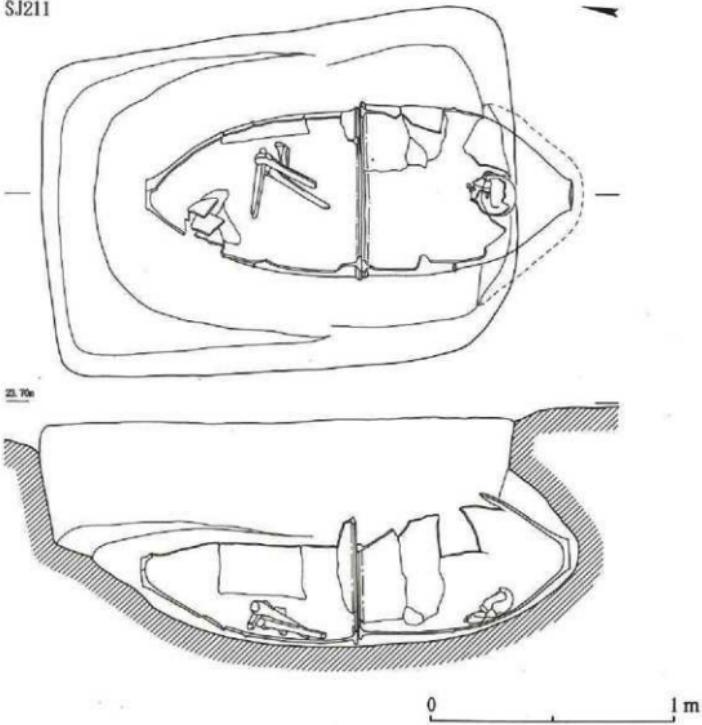


Fig.13 斎棺墓実測図3 SJ-211 (1/20)

SJ-212 (Fig.14・PL. 10-1)

C-7 Gr.で検出されたB群西埋葬を構成する小児用斂棺墓である。一次墓壙は、長さ1.04m、幅0.95m、深さ0.45mのほぼ方形を呈し、主軸方向にさらに長さ1.09m、幅0.58m、深さ0.29mの二次墓壙が掘り込まれている。斂棺は、上下ともに小型窓を使用した接口式の複式棺で、接合部には粘土による目張りが施されている。傾斜角度は-6°、主軸はN-10°-Wを計る。

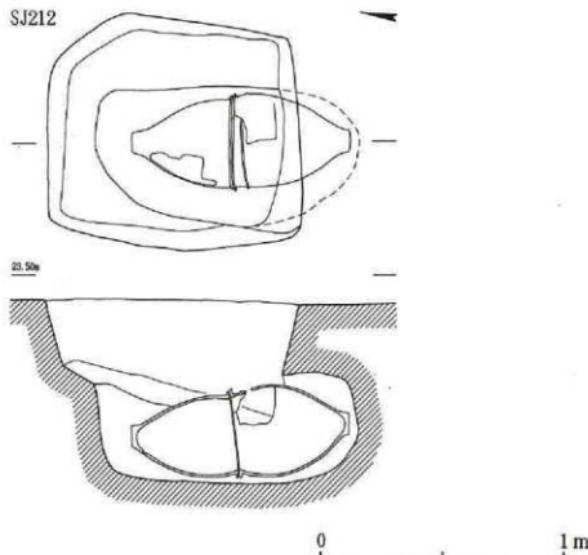


Fig.14 斎棺墓実測図 4 SJ-212 (1/20)

SJ-213 (Fig.15・PL. 10-2、3、PL. 11-4)

B-7 Gr. で検出されたB群東埋葬を構成する小児用喪棺墓である。一次墓壙は、長さ1.65m、幅0.93m、深さ0.54mの隅丸長方形を呈し、主軸方向にさらに長さ1.51m、幅0.91m、深さ0.27mの二次墓壙が掘り込まれている。喪棺は、上下ともに小型甕を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は-8°、主軸はN-25°-Wを計る。棺内下部に頭骨の一部が遺存している。

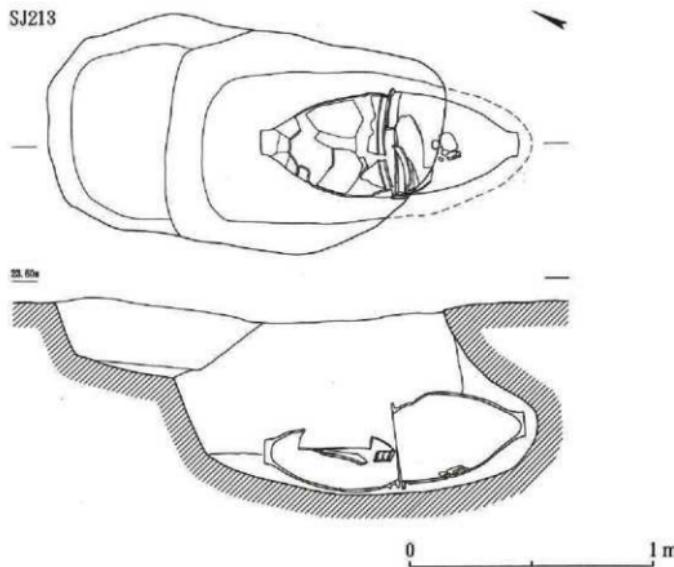


Fig.15 喪棺墓実測図 5 SJ-213 (1/20)

SJ-214 (Fig.16・PL. 10-4)

C-7 Gr. で検出されたB群西埋葬を構成する成人用壺棺墓である。一次墓壙及び棺体上部は後世の削平によつて失われている。二次墓壙は遺存部で長さ2.20m、幅1.40m、深さ0.46mを計る。壺棺は、上下ともに大型甕を使用した接口式の複式棺である。水平に埋置され、主軸はN-22°-Wを計る。棺内下蓋部分に頭骨の一部および歯が遺存している。

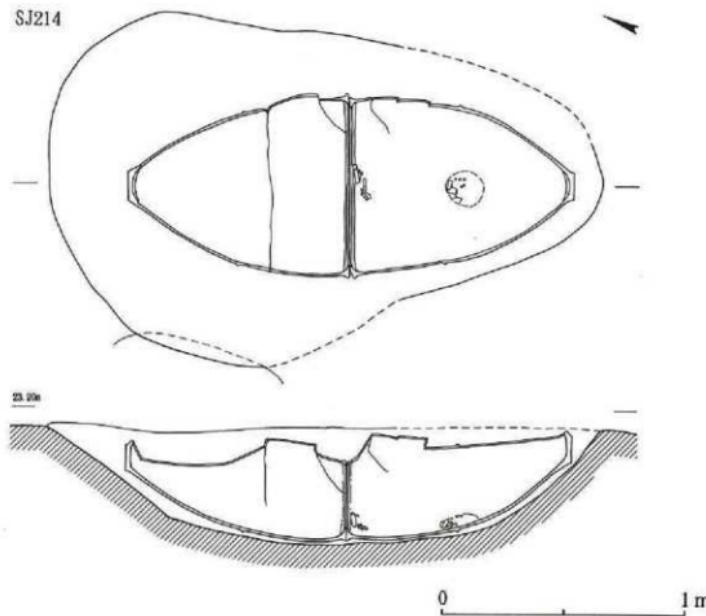


Fig.16 壺棺墓実測図 6 SJ-214 (1/20)

SJ-215 (Fig.17)

C-7 Gr. で検出されたB群西埋葬を構成する小児用壺棺墓である。一次墓壙及び棺体上部は後世の削平によって失われている。二次墓壙は遺存部で長さ0.78m、幅0.45m、深さ0.21mを計る。壺棺は、上下ともに小型壺を使用した接口式の複式棺である。ほぼ水平に埋置され、主軸はN-15°-Wを計る。

SJ-220 (Fig.17)

B-8 Gr. で検出されたB群東埋葬を構成する小児用壺棺墓である。一次墓壙及び棺体上部は後世の削平によって失われている。二次墓壙は遺存部で長さ0.99m、幅0.64m、深さ0.22mを計る。壺棺は、上下ともに小型壺を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は10°、主軸はN-94°-Wを計る。SJ-219の墓壙を切っている

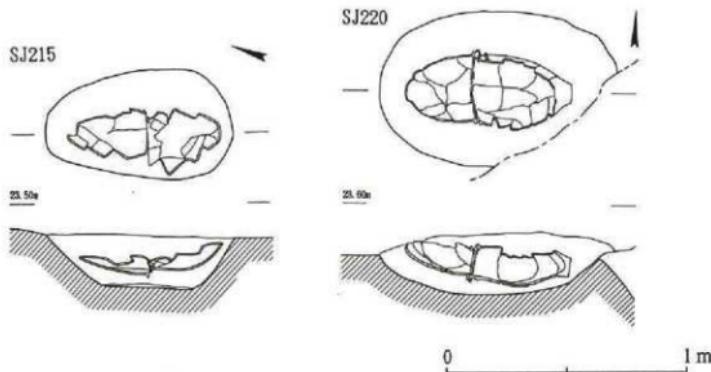


Fig.17 壺棺墓実測図 7 SJ-215・SJ-220 (1/20)

SJ-216 (Fig.18・PL. 10-5, 6)

B-7 Gr. で検出されたB群東埋葬を構成する成人用壺棺墓である。一次墓壙は、遺存部で長さ2.52m、幅1.40m、深さ0.33mの隅丸長方形を呈し、主軸方向にさらに長さ2.01m、幅0.87m、深さ0.25mの二次墓壙が掘り込まれている。壺棺は、上下ともに大型壺を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は7°、主軸はN-17°-Wを計る。

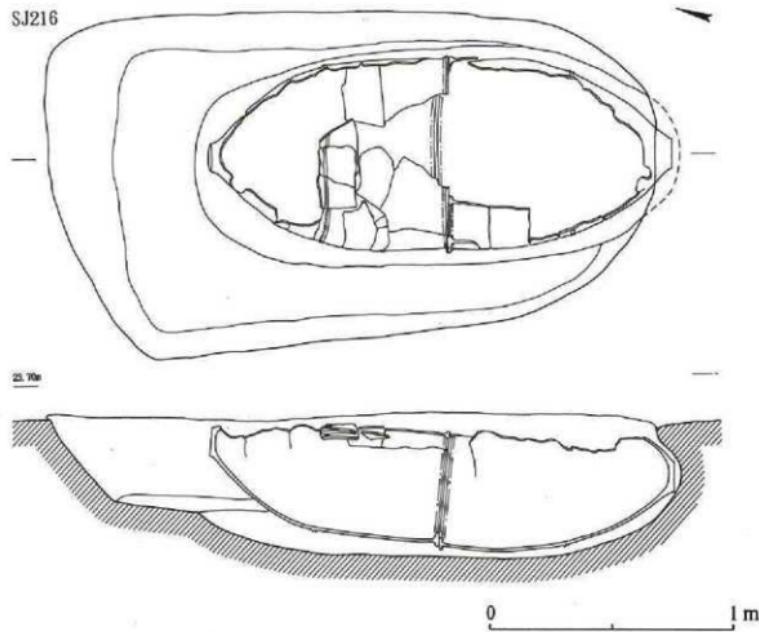


Fig.18 壺棺墓実測図 8 SJ-216 (1/20)

SJ-217 (Fig.19・PL. 10-7、PL. 11-1)

SJ-219の墓壙内で検出された小児用壺棺墓である。棺体は、SJ-219の墓壙の北西隅を掘り込み、0.39mの深さに埋置されている。SJ-219の墓壙に乱れなどがないことから同時に埋置されたものと推定される。壺棺は、上下ともに小型壺を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は6°、主軸はN-159°-Eを計る。

SJ-218 (Fig.19・PL. 10-7、PL. 11-1)

SJ-219の墓壙内で検出された小児用壺棺墓である。棺体は、SJ-219の墓壙の西側0.30mの深さに埋置されている。SJ-219の墓壙に乱れなどがないことから同時に埋置されたものと推定される。壺棺は、上下ともに小型壺を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は3°、主軸はN-162°-Eを計る。
°-Eを計る。

SJ-219 (Fig.19・PL. 10-7、PL. 11-1)

B-8 Gr. で検出されたB群東埋葬を構成する成人用壺棺墓である。一次墓壙は、長さ2.38m、幅1.55m、深さ0.45mの隅丸胴張りの長方形を呈し、主軸方向にさらに長さ2.10m、幅0.95m、深さ0.37mの二次墓壙が掘り込まれている。壺棺は、上下ともに大型壺を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は-1°、主軸はN-162°-Eを計る。

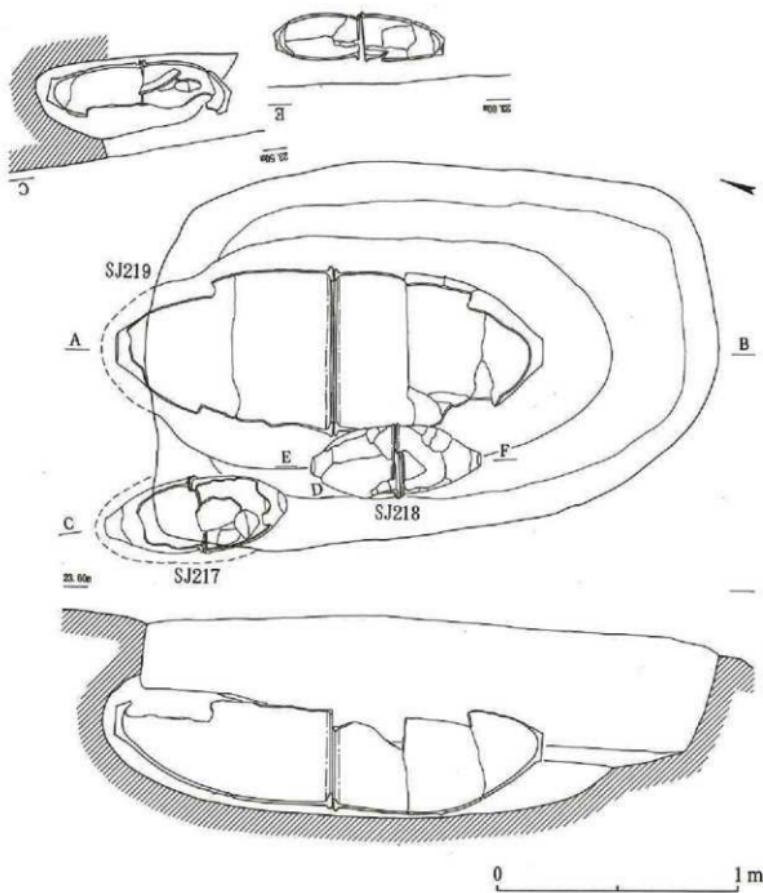


Fig.19 瓦棺墓実測図 9 SJ-217・SJ-218・SJ-219 (1/20)

SJ-221 (Fig.20)

B-8 Gr. で検出されたB群東埋葬を構成する小児用壺棺墓である。調査区境界の段丘崖によって墓壙、棺体とともに一部を残して失われている。一次墓壙は、遺存部で長さ1.13m、幅0.97m、深さ0.69m、二次墓壙は、遺存部で長さ0.58m、幅0.97m、深さ0.31mを計る。壺棺は、上壺の小型壺の底部、胴部の破片を残すのみである。傾斜角度は不明、主軸は、底部の方向から推定するとN-39°Wである。

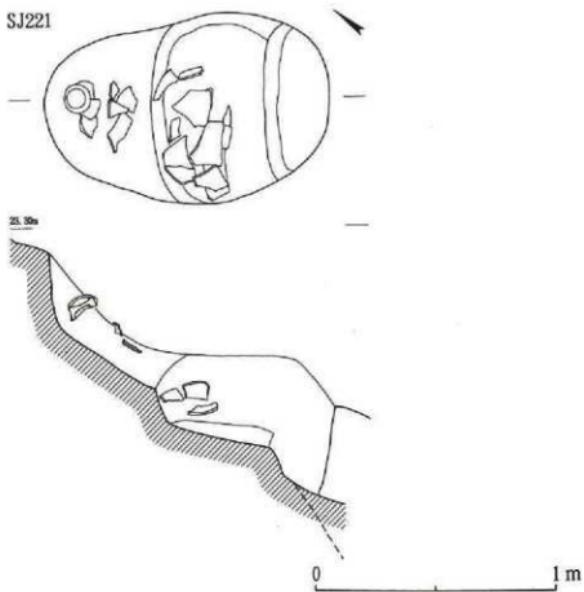


Fig.20 壺棺墓実測図10 SJ-221 (1/20)

SJ-222 (Fig.21・PL. 11-2)

C-8 Gr. で検出されたB群西埋葬を構成する小児用壺棺墓である。一次墓壙及び棺体上部は後世の削平によつて失われている。二次墓壙は遺存部で長さ1.90m、幅1.25m、深さ0.25mを計る。壺棺は、上下ともに小型壺を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は6°、主軸はN-26°Wを計る。SJ-223の墓壙を切っている。

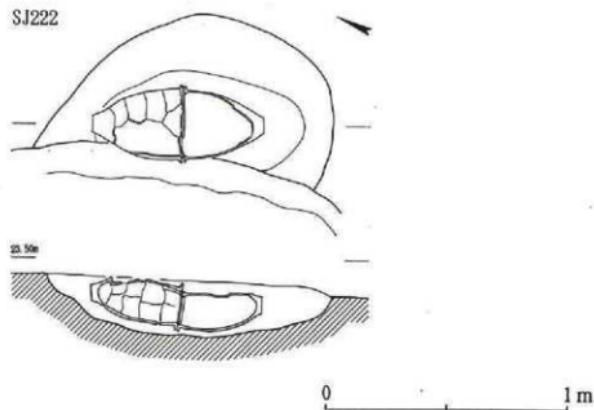


Fig.21 壺棺墓実測図11 SJ-222 (1/20)

SJ-223 (Fig.22・PL. 11-2、3)

C-8 Gr. で検出されたB群西埋葬を構成する成人用壺棺墓である。一次墓壙は、長さ2.62m、幅1.38m、深さ0.30mの隅丸胴張りの長方形を呈し、主軸方向にさらに長さ2.09m、幅1.38m、深さ0.58mの二次墓壙が掘り込まれている。壺棺は、上下ともに大型壺を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は-3°、主軸はN-164°-Eを計る。棺内下蓋部分に頭骨の碎片及び歯が遺存している。墓壙の一部をSJ-222に切られれている。

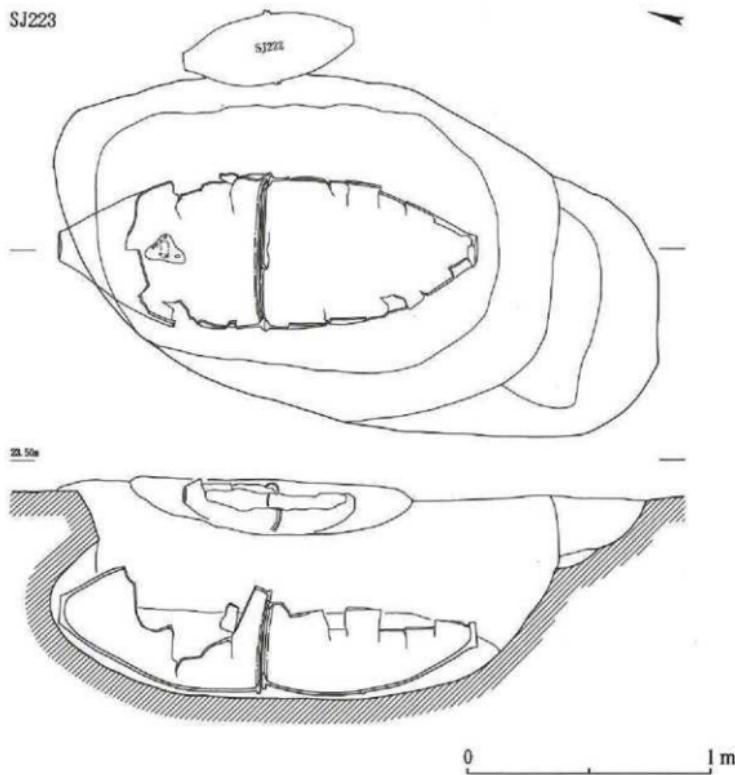


Fig.22 壺棺墓実測図12 SJ-223 (1/20)

SJ-224 (Fig.23・PL. 11-5)

C-8 Gr. で検出されたB群西列から約4m西に離れた位置の成人用壺棺墓である。一次墓壙は、遺存部で、長さ2.00m、幅0.83m、深さ0.21mの長方形を呈し、主軸方向にさらに長さ2.23m、幅0.83m、深さ0.51mの二次墓壙が掘り込まれている。要棺は、上下ともに大型甕を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は2°、主軸はN-174°-Wを計る。棺内上甕部分に大腿骨の一部が遺存している。

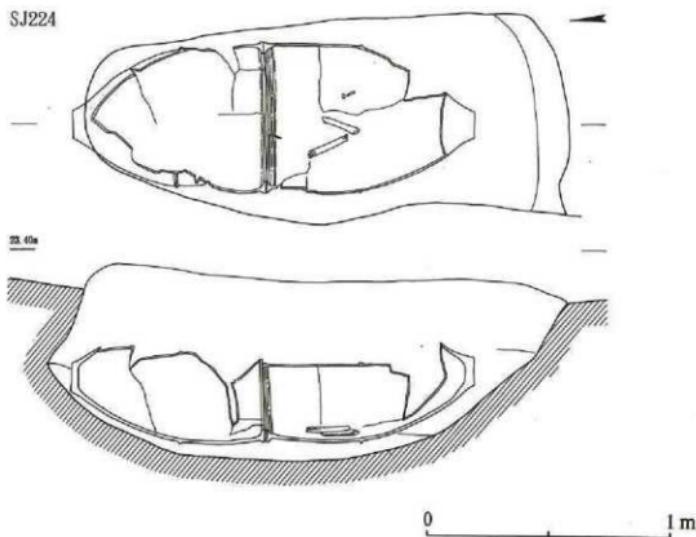


Fig.23 壺棺墓実測図13 SJ-224 (1/20)

SJ-225 (Fig.24・PL. 12-1~3)

C-8 Gr. で検出されたC群唯一の成人用槨墓である。一次墓壙東側をクワの植栽溝に切られている。一次墓壙は、遺存部で、長さ2.10m、幅1.22m、深さ0.94mの隅丸長方形を呈し、主軸方向にさらに長さ2.05m、幅0.79m、深さ0.24mの二次墓壙が掘り込まれている。槨棺は、上下ともに大型甕を使用した接口式の複式棺で接合部分には粘土による目張りが施されている。傾斜角度は4°、主軸はN-6°-Wを計る。棺内下槨部分に頭骨、上腕骨、大腿骨、下槨部分に脛骨、腓骨が遺存している。

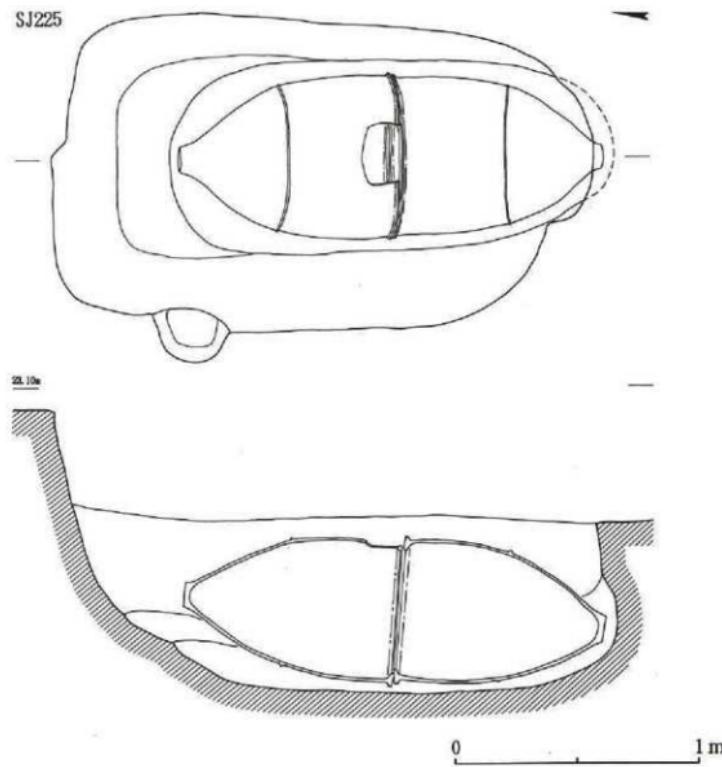


Fig.24 棚棺墓実測図14 SJ-225 (1/20)

SJ-226 (Fig.25・PL. 12-4)

D-9 Gr. で検出されたD群の列埋葬を構成する成人用槨墓である。一次墓壙のほとんどおよび上蓋の上部を後世の削平により失っている。二次墓壙は、遺存部で、長さ1.78m、幅1.22m、深さ1.26mを計る。槨棺は、上下ともに大型甕を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は46°、主軸はN-146°-Wを計る。

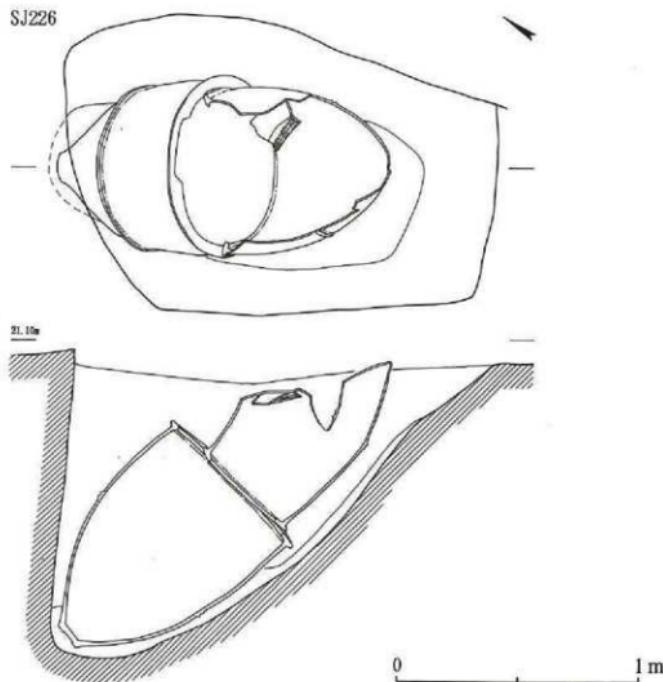


Fig.25 棺槨実測図15 SJ-226 (1/20)

SJ-227 (Fig.26・PL. 12-5)

D-10Gr. で検出されたD群の列埋葬を構成する成人用槨墓で、今回の出土した槨墓の中で最も南に位置するものである。一次墓壙は、長さ1.55m、幅1.19m、深さ0.90mの一辺が丸みを帯びた隅丸長方形を呈し、主軸方向にさらに長さ1.96m、幅1.08m、深さ0.14mの二次墓壙が掘り込まれている。槨は、上下ともに大型槨を使用した接口式の複式棺である。傾斜角度は-3°、主軸はN-40°Wを計る。

SJ227

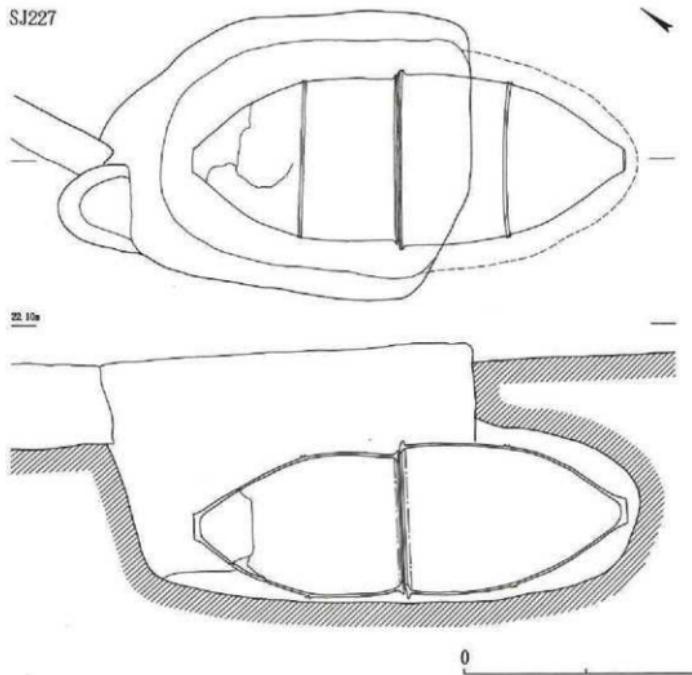


Fig.26 棚棺墓実測図16 SJ-227 (1/20)

SJ-228 (Fig.27・PL. 12-5)

C-8 Gr. で検出されたC群を構成する成人用甕棺墓である。クワの植栽溝によって一次墓壙のほとんどおよび上蓋と下蓋の一部までを失っている。一次墓壙は、遺存部で長さ1.40m、幅0.80m、深さ0.41mの隅丸長方形を呈し、主軸方向にさらに長さ1.11m、幅1.62m、深さ0.29mの二次墓壙が掘り込まれている。下蓋は大型甕が使用されている。傾斜角度は-40°、主軸はN-176°-Eを計る。

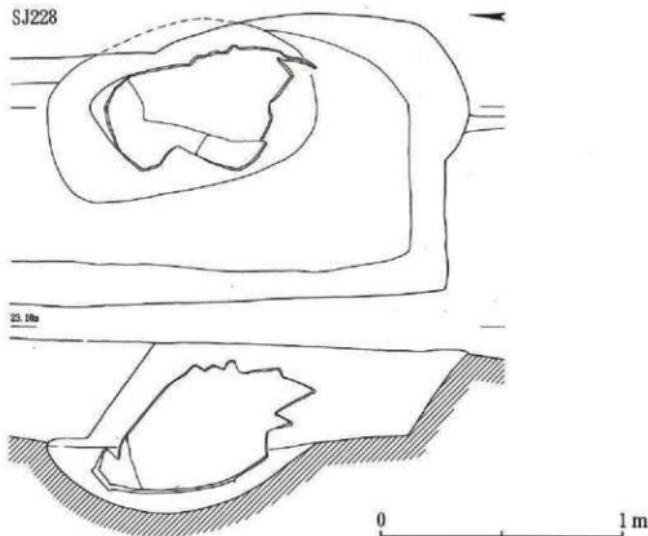


Fig.27 甕棺墓実測図17 SJ-228 (1/20)

SJ-229 (Fig.28)

C-8 Gr. で検出されたC群を構成する小児用壺棺墓である。後世の削平により下蓋の胸部が一部遺存するするのみである。

SJ-231 (Fig.28)

C-9 Gr. で検出されたC群を構成する小児用壺棺墓である。後世の削平により墓壙および棺体の上部を失っている。主軸はN-175°-Eである。

SJ-234 (Fig.28)

D-9 Gr. で検出されたC群を構成する小児用壺棺墓である。後世の削平により下蓋の胸部および底部が一部遺存するするのみである。主軸は、底部の方向から推定するとN-100°-Eである。

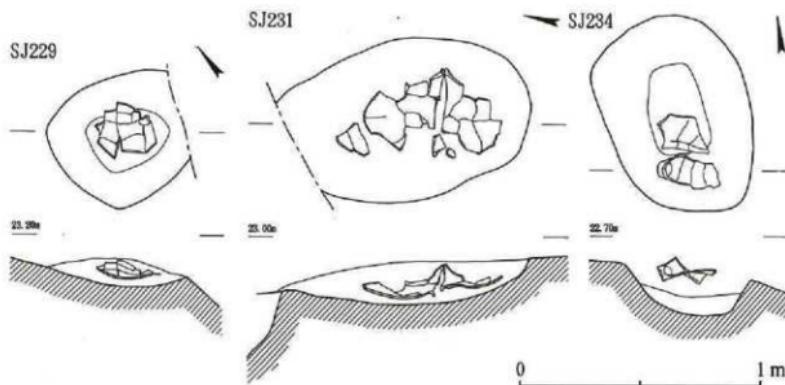


Fig.28 壺棺墓実測図18 SJ-229・SJ-231・SJ-234 (1/20)

SJ-235 (Fig.29・PL. 12-7)

D-9 Gr. で検出されたD群を構成する小児用壺棺墓である。後世の削平およびクワの植栽溝により上蓋の頭部破片が遺存するのみである。

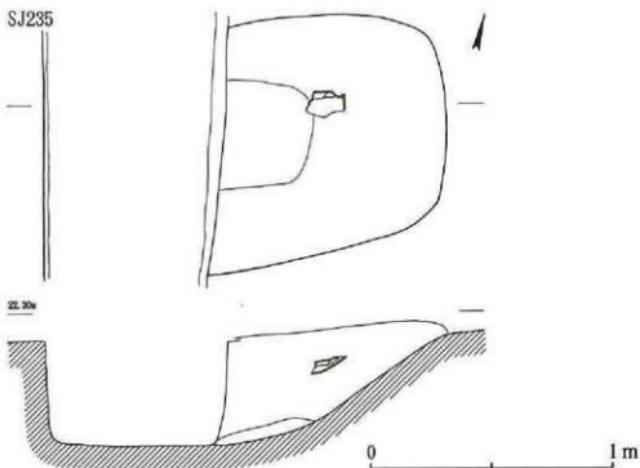
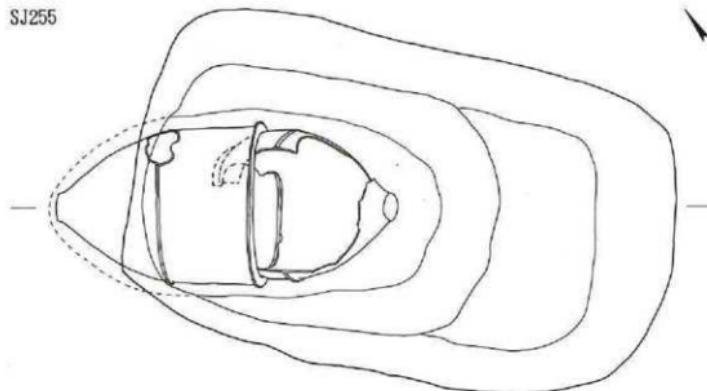


Fig.29 壺棺墓実測図19 SJ-235 (1/20)

SJ-255 (Fig.30・PL. 12-8)

D-9 Gr. で検出されたD群の列埋葬の北端を構成する成人用壺棺墓で、今回の出土した壺棺墓の中で最も西に位置するものである。一次墓壙は、長さ2.33m、幅1.67m、深さ0.99mの隅丸長方形を呈し、主軸方向からやや西に振れた方向に、さらに長さ1.86m、幅1.02m、深さ0.33mの二次墓壙が掘り込まれている。壺棺は、上壺は裁頭卵形の大型壺、下壺は、砲弾形の大型壺を使用しており、下壺に上壺の口縁部を挿入する挿入式の複式棺である。傾斜角度は下壺で12°、主軸はN - 126° - Eを計る。

SJ255



22.0m

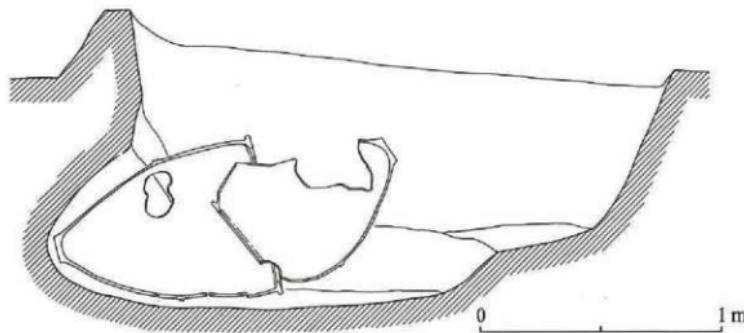


Fig.30 壺棺墓実測図20 SJ-255 (1/20)

SJ-256 (Fig.31)

C-9 Gr. で検出されたC群を構成する小児用壺棺墓で、調査区外の段丘崖斜面に位置している。調査区境界の段丘崖によって墓壙、棺体ともに一部を残して失われている。壺棺は、上妻の小型壺の底部、胸部の破片を喪すのみである。主軸は、底部の方向から推定するとN-31°Wである。

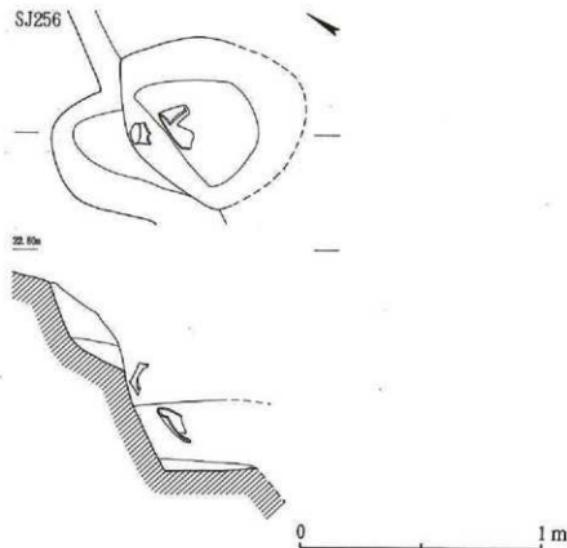


Fig.31 壺棺墓実測図21 SJ-256 (1/20)

V. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、甕棺墓として用いられた弥生式土器、および各遺構から出土した各時代の土器や石器などがある。各遺構から出土した土器や石器は非常に少量であった。ここでは、甕棺墓として用いられた土器および各遺構から出土した遺物のうち特徴的なものについて報告したい。

1. 甕棺 (Fig.32~34・PL.13-1・Tab. 3)

ここでは、甕棺墓の埋葬主体として用いられた土器について、出土した臺棺墓28基のうち、19基の甕棺墓について口縁部を図示し、概要を報告したい。

今回の調査で出土した甕棺墓に使用された土器は、その形態により大型甕、小型甕ともA~Dの4形態にそれぞれ分類できる。

大型甕A

器体は砲弾形を呈し、小さなT字形口縁の甕で、胴部に突帯がないもの。SJ-223下甕、器高84cm、口径64cm。

大型甕B

器体は砲弾形を呈し、内側への張りだしがやや顕著なT字形口縁の甕で、胴部に1条の断面三角形の突帯が付くもの。SJ-211上・下、SJ-214上・下、SJ-219上・下、SJ-223上、SJ-224上・下、SJ-225上・下甕。法量は、器高80cm~97cm、口径58cm~73cm。

大型甕C

器体は砲弾形を呈し、内側への張りだしが顕著なT字形口縁の甕で、胴部に2条の断面三角形の突帯が付くもの。SJ-216上・下、SJ-226上・下、SJ-227上・下、SJ-255下甕。法量は、器高86cm~98cm、口径68cm~76cm。

大型甕D

戴頭卵形の器体に、内側への張りだしが顕著なT字形口縁がつく甕で、胴部に2条の断面三角形の突帯が付くもの。SJ-255上甕。器高71cm、口径45cm。

小型甕A

器体は砲弾形を呈し、逆L字形口縁がつく甕で、口縁部下に突帯がないもの。SJ-212上、SJ-215上・下、SJ-217上、SJ-218上・下、SJ-220上、SJ-222上・下甕。法量は、器高33cm~43cm、口径26cm~35cm。

小型甕B

器体は砲弾形を呈し、逆L字形口縁がつく甕で、口縁部下に1条の断面三角形の突帯が付くもの。SJ-209上・下、SJ-213上・下、SJ-217下、SJ-220下甕。法量は、器高36cm~55cm、口径27cm~41cm。

小型甕C

胴部がやや張りをもつ、いちじく形の器体に、逆L字形口縁がつく甕で、口縁部下に突帯がないもの。SJ-231下甕。器高は遺存部で25cm、口径39cm。

小型甕D

胴部がやや張りをもつ、いちじく形の器体に、逆L字形口縁がつく甕で、口縁部下に1条の断面三角形の突帯が付くもの。SJ-210上・下、SJ-231上甕。法量は、器高48cm程度、口径35cm~39cm。

Tab. 3 八幡遺跡出土甕一覧表

甕 番号	上甕 下底	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	器体の形態	口縁部の断面形態	突 帯
SJ-207	上	—	—	—	—	—	—
	下	小形甕	—	—	—	—	—
SJ-208	上	—	—	—	—	—	—
	下	小型甕	—	—	—	—	—
SJ-209	上	小型甕	36	32	砲弾形	逆L字形	口縁部下に断面三角形の突帯1条
	下	小型甕	38	29	砲弾形	逆L字形	口縁部下に断面三角形の突帯1条
SJ-210	上	小型甕	49	36	いちじく形	逆L字形	口縁部下に断面三角形の突帯1条
	下	小型甕	48	37	いちじく形	逆L字形	口縁部下に断面三角形の突帯1条
SJ-211	上	大型甕	89	72	砲弾形	T字形	胴部に断面三角形の突帯1条
	下	大型甕	88	73	砲弾形	T字形	胴部に断面三角形の突帯1条
SJ-212	上	小型甕	43	35	砲弾形	逆L字形	—
	下	小型甕	48	41	いちじく形	逆L字形	口縁部下に断面三角形の突帯1条
SJ-213	上	小型甕	55	35	砲弾形	逆L字形	口縁部下に断面三角形の突帯1条
	下	小型甕	54	41	砲弾形	逆L字形	口縁部下に断面三角形の突帯1条
SJ-214	上	大型甕	92	68	砲弾形	T字形	胴部に断面三角形の突帯1条
	下	大型甕	93	68	砲弾形	T字形	胴部に断面三角形の突帯1条
SJ-215	上	小型甕	■23	28	砲弾形	逆L字形	—
	下	小型甕	■30	30	砲弾形	逆L字形	—
SJ-216	上	大型甕	98	76	砲弾形	T字形	胴部に断面三角形の突帯2条
	下	大型甕	94	75	砲弾形	T字形	胴部に断面三角形の突帯2条
SJ-217	上	小型甕	37	29	砲弾形	逆L字形	—
	下	小型甕	40	34	砲弾形	逆L字形	口縁部下に断面三角形の突帯1条
SJ-218	上	小型甕	34	29	砲弾形	逆L字形	—
	下	小型甕	36	34	砲弾形	逆L字形	—

櫻棺番号	上裏 下裏	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	器体の形態	口縁部の断面形態	突 蒂
SJ-219	上	大型甕	97	67	砲弾形	T字形	肩部に断面三角形の突蒂1条
	下	大型甕	90	67	砲弾形	T字形	肩部に断面三角形の突蒂1条
SJ-220	上	小型甕	*28	26	砲弾形	逆L字形	
	下	小型甕	41	27	砲弾形	逆L字形	口縁部下に断面三角形の突蒂1条
SJ-221	上	小型甕	—	—	砲弾形	—	—
	下	—	—	—	—	—	—
SJ-222	上	小型甕	38	31	砲弾形	逆L字形	
	下	小型甕	33	30	砲弾形	逆L字形	
SJ-223	上	大型甕	89	64	砲弾形	T字形	肩部に断面三角形の突蒂1条
	下	大型甕	84	64	砲弾形	T字形	
SJ-224	上	大型甕	88	58	砲弾形	T字形	肩部に断面三角形の突蒂1条
	下	大型甕	80	58	砲弾形	T字形	肩部に断面三角形の突蒂1条
SJ-225	上	大型甕	89	66	砲弾形	T字形	肩部に断面三角形の突蒂1条
	下	大型甕	87	65	砲弾形	T字形	肩部に断面三角形の突蒂1条
SJ-226	上	大型甕	*82	74	砲弾形	T字形	肩部に断面三角形の突蒂2条
	下	大型甕	96	73	砲弾形	T字形	肩部に断面三角形の突蒂2条
SJ-227	上	大型甕	86	72	砲弾形	T字形	肩部に断面三角形の突蒂2条
	下	大型甕	93	75	砲弾形	T字形	肩部に断面三角形の突蒂2条
SJ-228	上	—	—	—	—	—	—
	下	大型甕	*95	—	砲弾形	T字形	肩部に断面三角形の突蒂1条
SJ-229	上	—	—	—	—	—	—
	下	小型甕	—	—	砲弾形	—	—
SJ-231	上	小型甕	*30	35	いちじく形	逆L字形	口縁部下に断面三角形の突蒂1条
	下	小型甕	*25	39	いちじく形	逆L字形	
SJ-234	上	—	—	—	—	—	—
	下	小型甕	—	—	—	—	—
SJ-235	上	小型甕	—	—	—	—	—
	下	—	—	—	—	—	—
SJ-255	上	大型甕	71	45	截頭卵形	T字形	肩部に断面三角形の突蒂2条
	下	大型甕	88	68	砲弾形	T字形	肩部に断面三角形の突蒂2条
SJ-256	上	小型甕	—	—	—	—	—
	下	—	—	—	—	—	—

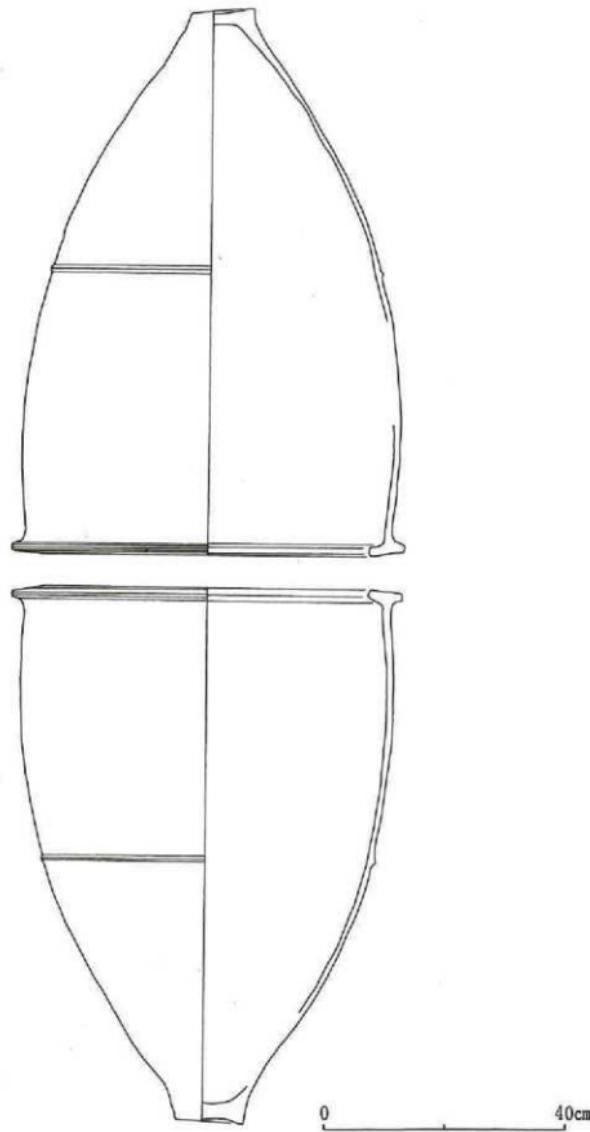


Fig.32 瓢棺実測図 SJ-225 (1/8)

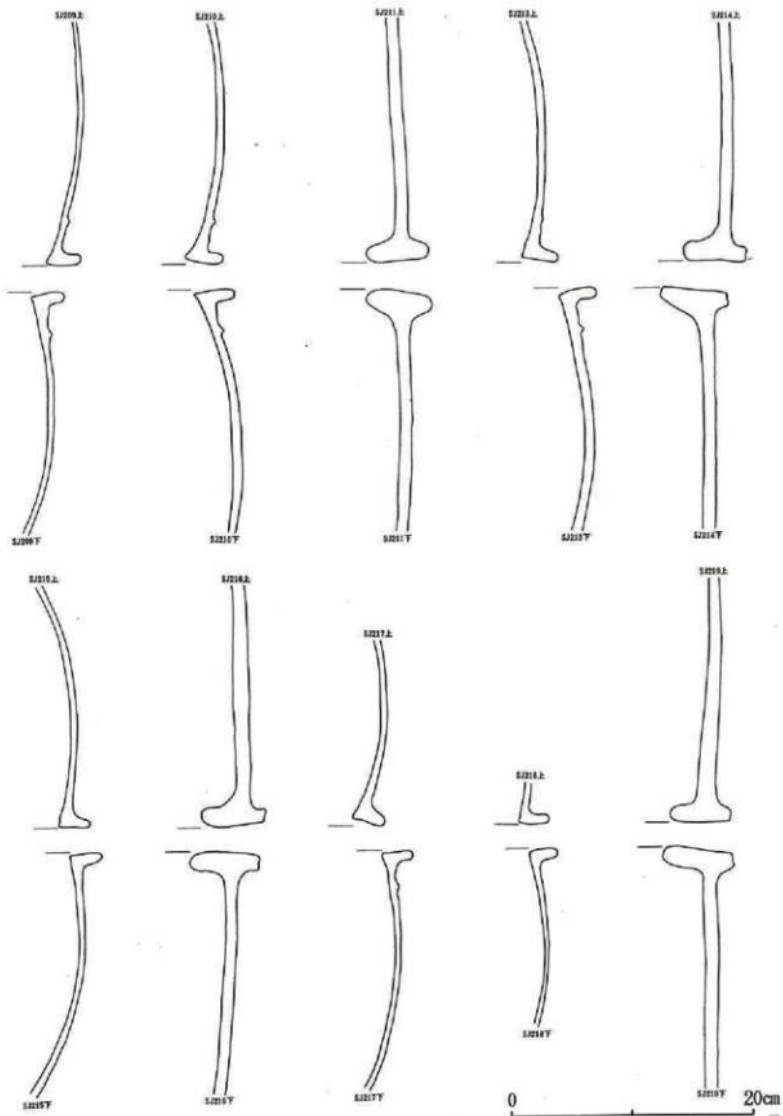


Fig.33 墓棺口縁実測図 1 SJ-209～SJ-219 (1/4)

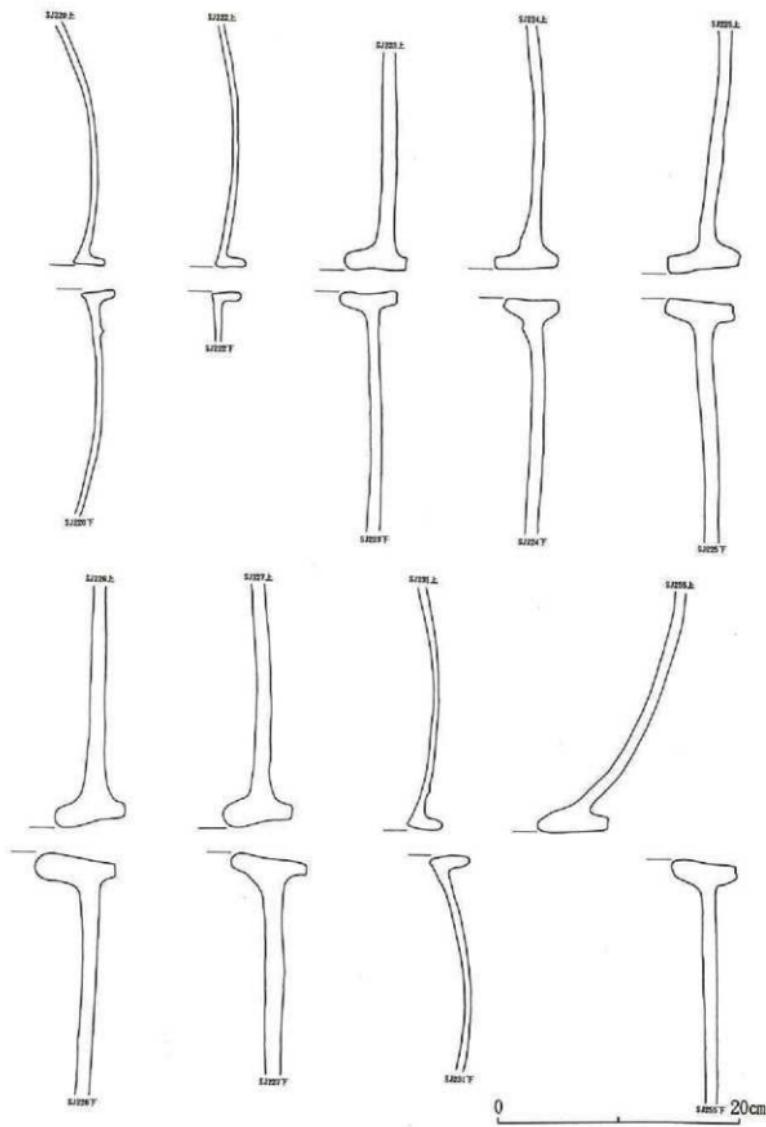


Fig.34 變相口緣実測図 2 SJ-220~SJ-255 (1/4)

2. その他の土器・石器 (Fig.35・PL. 13)

今回の調査で壺棺墓以外の遺構から出土した土器・石器などの遺物の出土量はそう多くはない。なかでも土器は、小片が出土しているが、その多くは図示しなかった。ここでは、土器 6 点、石器 2 点について報告したい。

土器 (Fig.35・PL. 13)

1、3、4 は、縄文式土器である。

1 は、晩期の刻み目突帯文をもつ壺。口縁部外面、胴部上位の屈曲部にそれぞれ突帯が貼りつけられ、にぶい刻み目が施されている。内外面ともにナデ。暗褐色を呈す。補修孔と思われる径 6 mm の穴が焼成後に穿孔されている。SK-110出土。

3 は、後・晩期の粗製の壺の口縁部で、内外面に粗い条痕を残す。茶褐色を呈す。2 区北東部の耕作溝出土。

4 も、晩期の刻み目突帯文をもつ高环の壺部。口縁部外面に突帯を貼りつけ、ヘラ状工具の先端を押しつけたような鋭い刻み目が施されている。明黄褐色を呈す。器面が荒れているため調整は不明。SK-237出土。

2 は、口縁端部がやや外反する丸底の土師器の環で、底部外面にヘラケズリが施されているほかは、器面が荒れているために調整は不明である。明黄褐色を呈す。SK-111出土。

5 は、口縁部にかえりをもつ須恵器の环。口縁部ヨココナデ、底部にはヘラケズリが施されている。焼成は良好で灰褐色を呈す。SK-301出土。

6 は、須恵器の壺の肩部で、外面に格子目、内面に同心円のタスキ目を残す。明茶褐色を呈す。

石器 (PL. 13)

石匙と石鎌が出土している。いずれもサスカイト製。

石匙は、高さ 5.7cm、幅 6.8cm、厚さ 1.0cm、重量 32.9g。SK-240出土。

石鎌は、凹基式で、長さ 2.8cm、幅 2.3cm、厚さ 0.6cm、重量 3.8g。土器 3 と同じ耕作溝出土。

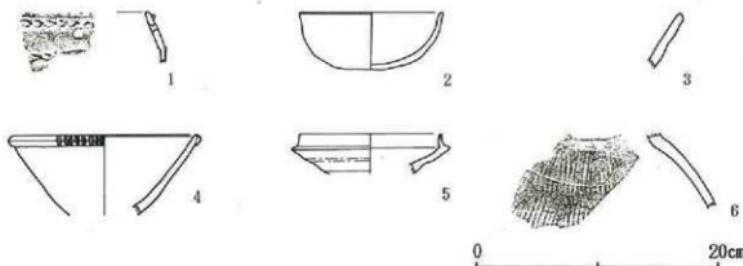


Fig.35 出土土器実測図 (1/4)

VI. まとめ

今回の調査では、後世の耕作などでかなり遺跡の原状が損なわれていたにもかかわらず、竪穴式住居址 2軒、建物址 1棟、土壙49基、甕棺墓28基その他が検出され、一応の成果を修めることが出来た。八藤遺跡全体については、先の確認調査、今回の調査により縄文時代から奈良・平安期までの複合遺跡であることが判明したが、今後も農業基盤整備事業に伴い数次の発掘調査が予定されており、それらの調査の成果を待って検討することしたい。

以下、今回の調査の成果、とくに甕棺墓について調査所見を簡単に述べ、まとめとしたい。

甕棺墓の分布について

今回の調査で出土した28基の甕棺墓は、2区丘陵先端の南東縁辺部分に集中して分布し、さらに、その分布の状況からA～Dの4群に分けることができる。各群の甕棺墓の配置をみると、B群では東西2列の列埋葬、D群では1列の列埋葬の意識が看取される。とくに、B群においては、東列のSJ-209からSJ-219までの4基と西列のSJ-210からSJ-223までの4基は、2.5m～3mの間隔で東西対称に並列して埋葬されている。

埋葬形態について

今回出土した甕棺墓の埋葬主体として使用された土器=甕棺は、成人用としては大型の甕が、小児用としては小型の甕が、それぞれ用いられており、挿入式のSJ-255をのぞいて、確認できるものは、すべて接口式の複式棺であった。甕棺の傾斜角度も、SJ-226の46°、SJ-228の40°、SJ-225の12°をのぞけば、ほとんどが±10°以内で、ほぼ水平に埋置されている。

また、今回の調査では人骨の一部が遺存する甕棺墓が、6基出土したが、頭位はいずれも下甕にあった。副葬品を持つ甕棺墓は、皆無であった。

甕棺として使用された土器について

また、個々の甕棺の形態についてみると、大型甕はA類～D類の4形態、小型甕はA類～D類の4形態に分類され、それぞれ大型甕はA類→B類→C・D類、小型甕はA・B類→C・D類の順で形態が変化するものと考えられるが、その時期については、いずれも弥生時代中期前半の汲田式の範疇におさまるものである。

つぎに、A群を除くB～D群の甕棺についてみると、B群は大型甕A類・B類を主に、C群は大型甕B類・C類を主に、D群は大型甕C類・D類を主に、それぞれ構成されており、丘陵の東部から南部へ順次墓域を移して営まれた可能性が高い。

今回の調査で出土した甕棺墓の28基という出土数は、後世の耕作などによる削平、大谷川による丘陵南東縁辺部分の浸食などによって消失した甕棺墓の数を加えて考慮しても、そう極端に増えないものと考えられる。以上のようなことを考え合わせると、八藤丘陵の甕棺墓群は、当時この丘陵を占拠していた集団によって、短期間にうちに営まれたものと考えられる。

八藤遺跡の東側には、大谷側をはさんで船石丘陵が指揮の間に位置しており、この船石丘陵の弥生集団は、前期末から後期にかけて連続として甕棺墓を営みつけ、結果的には数百単位の数の甕棺墓を残している。これは、時を同じくして甕棺墓を営んでいる八藤丘陵の墳墓のあり方と対照的であり、八藤遺跡の弥生集団の動向を考えるうえでも、今回検出された甕棺墓群は貴重な資料と言えよう。

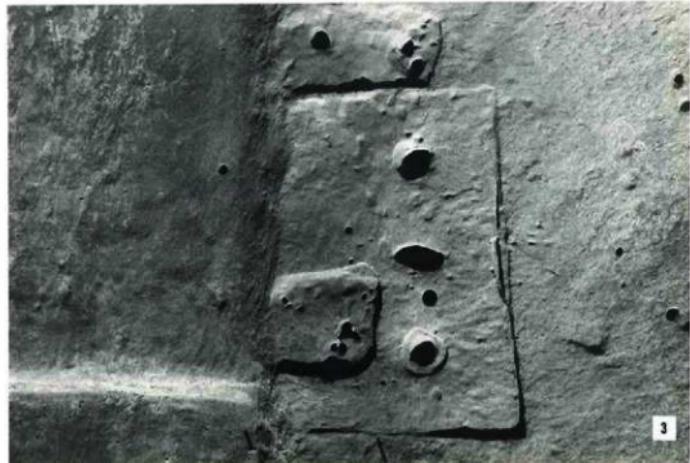
図 版



1 1区全景 一写真上方が北—



2 2区南部壺棺墓集中部分
—写真上方が北—

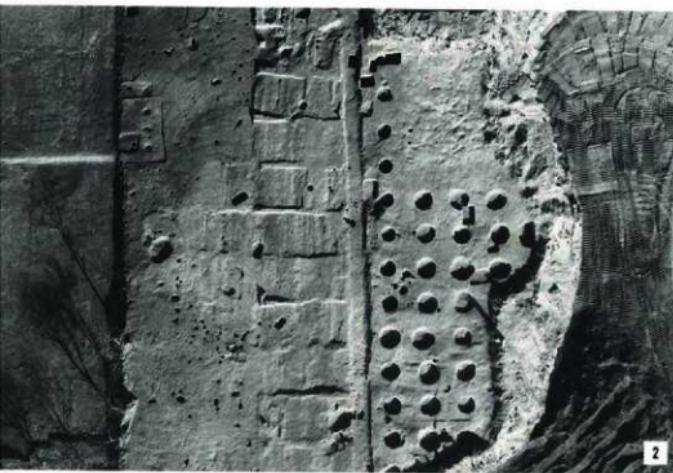


3 SH-241南より



1

1 SH-242 一南より一



2

2 2区北東部全景
—写真上方が北—



3

3 3区全景 一東より一



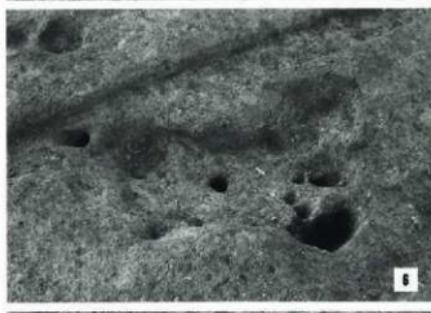
1



5



2



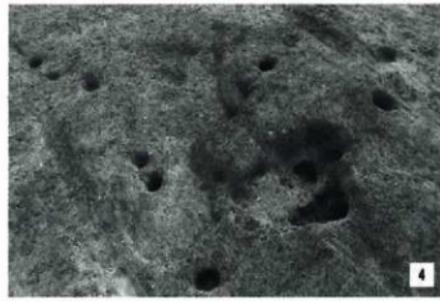
6



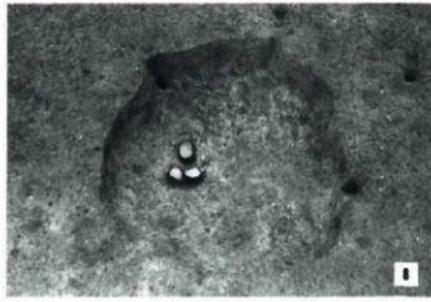
3



7



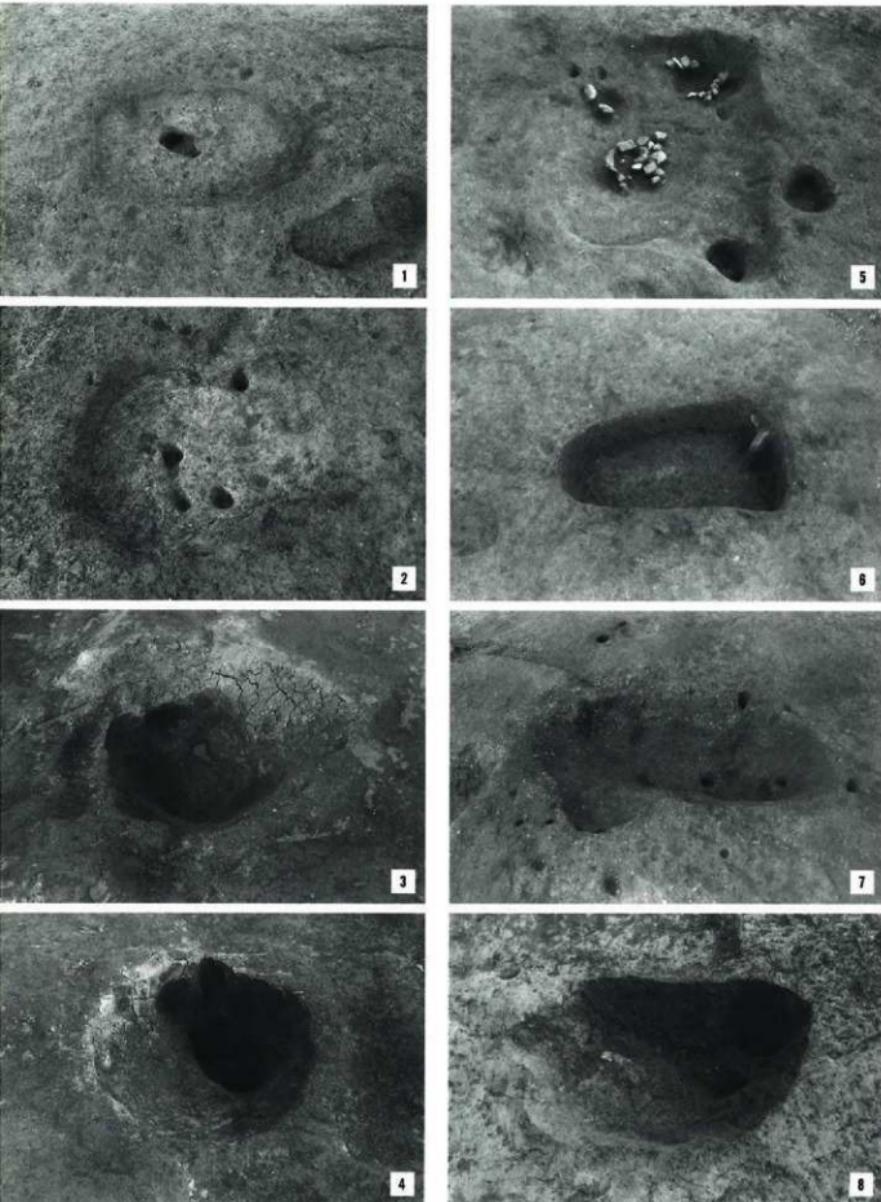
4



8

- 1 SK-103 一北西より
2 SK-104・SK-105・SK-106 一西より
3 SK-106 一北より
4 SK-114左・SK-107右 一北より

- 5 SK-108 一西より
6 SK-109 一南東より
7 SK-110 一西南より
8 SK-111 一北より



1 SK-115 一西より一

2 SK-117 一南より一

3 SK-204 一南より一

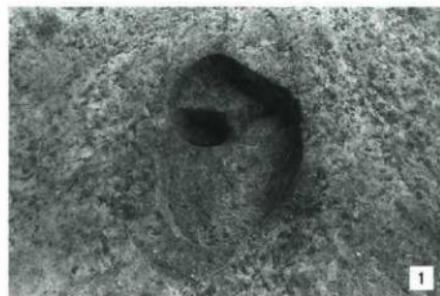
4 SK-205 一西より一

5 SK-237 一北東より一

6 SK-238 一北東より一

7 SK-240 一南より一

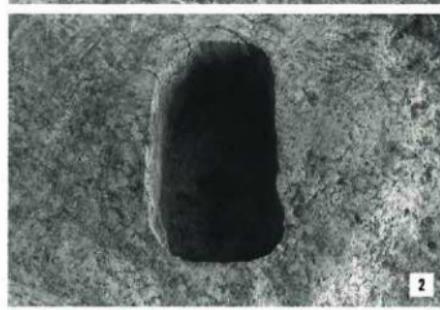
8 SK-243 一西より一



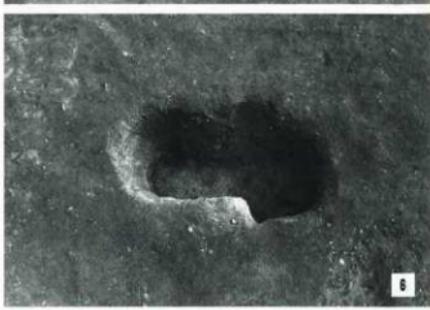
1



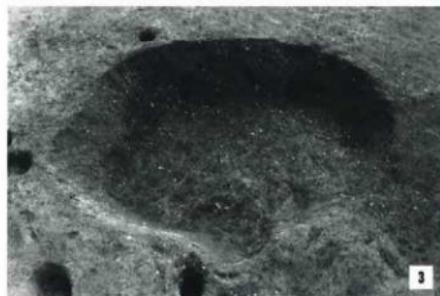
5



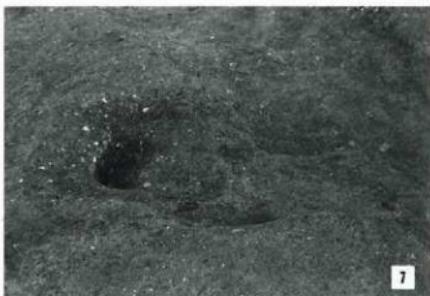
2



6



3



7



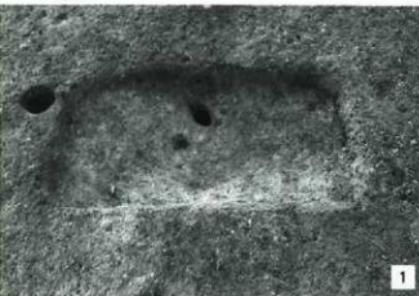
4



8

- 1 SK-244 一北西より
2 SK-245 一南西より
3 SK-246 一北西より
4 SK-246 一北より

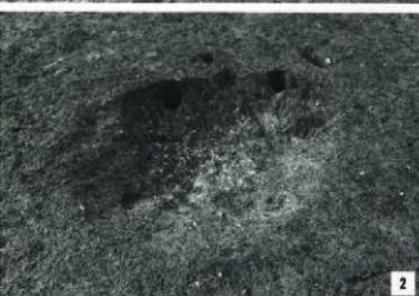
- 5 SK-247～SK-250 一北より
6 SK-206 一北西より
7 SK-251 一南西より
8 SK-243 一北東より



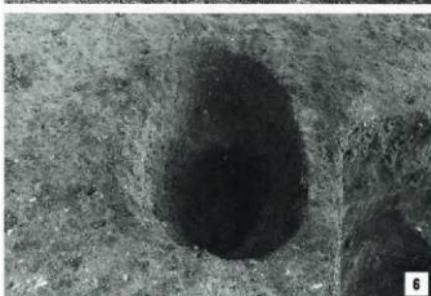
1



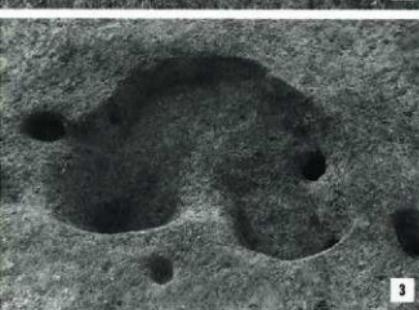
5



2



6



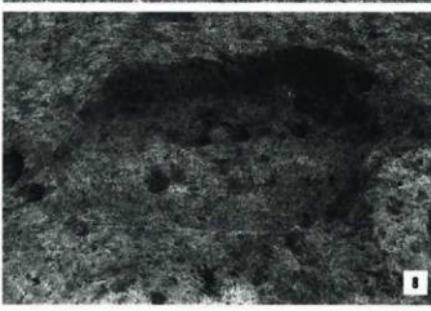
3



7



4



8

- 1 SK-260 一東より
2 SK-261 一北より
3 SK-262 一東より
4 SK-263 一西より

- 5 SK-265 一南より
6 SK-266 一南より
7 SK-267 一南より
8 SK-270 一南東より



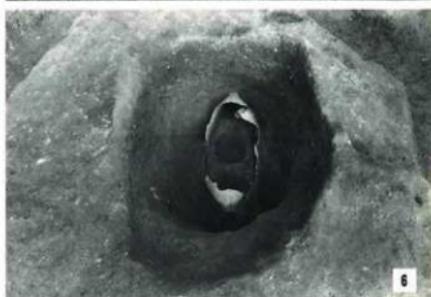
1



5



2



6



3



7



4



8

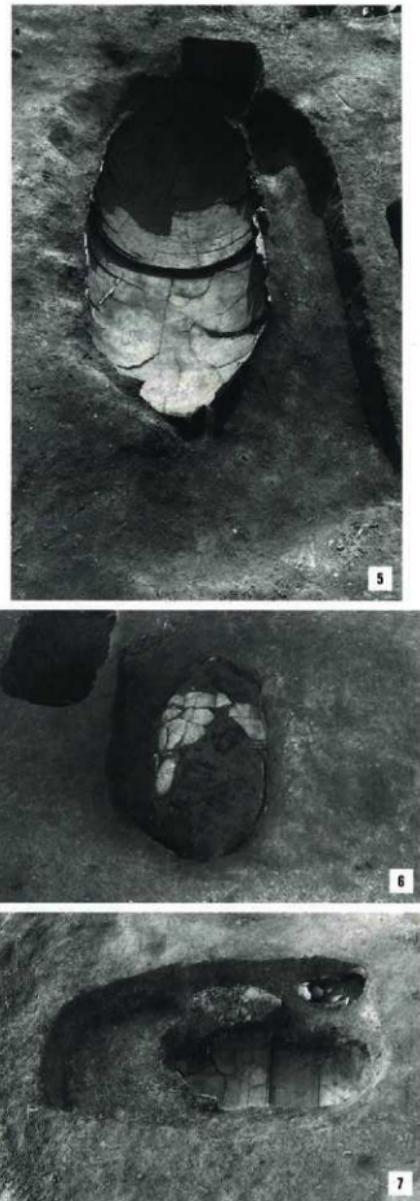
9

- 1 SK-301 一北東より
2 SK-302 一南東より
3 SJ-207 一南東より
4 SJ-208 一西より

- 5 SJ-209 一南東より
6 SJ-210 一南より
7 SJ-211 一北より
8・9 SJ-211 人骨遺存状態



1 SJ-212 一北より
 2 SJ-213 一北西より
 3 SJ-213 人骨遺存状態
 4 SJ-214 一南東より



5 SJ-216 完掘状態 一北西より
 6 SJ-216 検出状態 一北西より
 7 SJ-217・SJ-217・SJ-217
 一北東より



1 SJ-217 • SJ-217 • SJ-217

—北東より—

2 SJ-222 • SJ-233 —南東より—

3 SJ-223 —南東より

4 SJ-213 —北西より—

5 SJ-224 —南より—



1



2



3



4



5



6



7



8

1 SJ-225 検出状態 一北より一

2 SJ-225 完壊状態 一北より一

3 SJ-225 人骨遺存状態

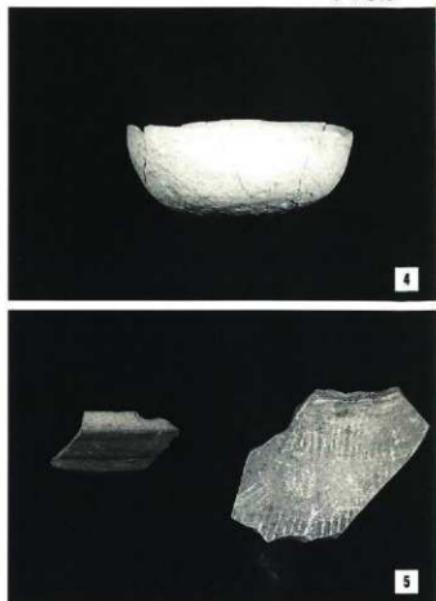
4 SJ-226 一北西より一

5 SJ-227 一北西より一

6 SJ-234 一西より一

7 SJ-235 一南より一

8 SJ-255 一北東より一



1 SJ-225石棺

2 1 • 3

3 4

4 2

5 5 • 6

6 石匙・石鎌

報告書抄録

ふりがな	やとういせき I						
書名	八藤遺跡 I						
副書名	平成元年度佐賀県農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	上峰町文化財報告書						
シリーズ番号	第13集						
編著者名	原田 大介						
編集機関	上峰町教育委員会						
所在地	〒849-01 佐賀県三養基郡上峰町大字坊所319-4 上峰町民センター内 Tel 0952-52-3833						
発行年月日	1997年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
八藤	佐賀県三養基郡 上峰町大字 堀 字八藤	41345	1004 2031 3015	33°21'29"	130°25'35"	1989.9.25 1990.1.26	3,800m ²	農業基盤 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八藤	集落跡 墳墓跡	縄文時代 奈良・平安	竪穴式住居址 土壙 甕棺墓	2軒 49基 28基	縄文式土器(晚期) 石器類 弥生式土器(中期) 土師器 須恵器

上峰町文化財調査報告書第13集

八藤遺跡 I

平成9年3月24日印刷

平成9年3月31日発行

編集行
編

上峰町教育委員会

佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4

印刷

(株)昭和堂印刷 佐賀支店

佐賀県佐賀市神野西4-1-32





